**№19　テーマ『人間の格とは何か』**

**講話日2006年2月20日**

**芳村：皆さん、こんにちは。**

**一同：こんにちは。**

**芳村：今日は本当にお忙しい中を勉強で大変ですけど、今年最初のお話ということで、今日は、「人間の格とは何か」というテーマですね。これは非常に現実的には、仕事をしていくうえでも、またさまざまな社会的な、あるいは家庭的な人間関係のうえでも、非常に大事なテーマです。特にこれから日本人がアメリカ人に代わって世界の指導者となって、世界のさまざまな政治、経済、社会、文化の中で、責任を持った言動をしていかなければならない。そのためには、やっぱり、いろんな民族からわれわれ自身が能力的にも、また人間性においても、信頼されるという、そういう自分というものをつくっていかないと、なかなか自分の言ったことが、ほかの人に受け入れられるというようなことがなってきません。**

**その意味でも、この自分自身というものを、本物の人間というふうに言うことができるような水準に磨いていく努力。これは、お客さんに対応する場合でも、それは非常に大事なことですけども、だけども、一般的にいって、いろんな人間関係の中で、そういうこの相手から人間として信頼される、尊敬される。まあ、そういう状況をつくっていくために、どうしてもこれは考えなければならない重要な課題。これが人間の格ということですね。**

**それで、この人間には人間の格があるということを、まず基本的にちゃんと理解する必要があるわけですけど、人間というのは、犬猫ではない。どんな人でも犬猫のような扱いをされればむかつくという、そういう気持ちが湧いてくるということは、俺は犬猫ではないという、人間だという、そういうこの意識が、人間には生まれながらに命に潜在的にあるんだというふうに、言わなければなりません。それは、この人間というのは、他の動植物とは違う、まったく違う命のかたちというものを持っておる。この他の動植物とは違う、まったくこの独自な命のかたちというのを人間は持っておるという、そこにこの人間の格というものの基本原理があります。**

**これはどういうことなのかといったら、あらゆるもののかたちという、この存在はすべてかたちを持っておりますけど、かたちというものは、常に内容の表現という、そういう構造を持っております。建築というものも、やっぱりこれは、どういう意味を、その建築のかたちにおいて表現するかという、そういうことによって、家のかたち、建物のかたちは決まってくるわけであって、かたちというのは、そのかたちをつくり出す根底にある機能とか、あるいは、この意味とか、価値とか、構造とか、そういうふうなものが、かたちとして表現されてくるわけですので、かたちは内容の表現であるという言い方ができるわけであります。**

**どうして、人間はこういう特別な他の動植物とは違う命のかたちを持っておるのか。それは、そういう人間なりの特有の内容があるからであるというふうに考えなければなりません。そういう意味で、われわれがこの人間という命のかたちにふさわしい内容を持てば、人間として本物と言えるし、また、この命のかたちにふさわしくない内容である状態では偽物だという、そういう判断ができるわけであります。だけども、この人間という命のかたちは、自分でつくったものではない。これは確実に、この母なる宇宙の摂理の力によって与えられて、つくられたかたちをわれわれは生きておるのである。そのことを考えるならば、われわれの命のかたちには、この命のかたちをつくった母なる宇宙の思いと、願いと、祈りがこもっておるというふうに考える必要がある。ということは、われわれが人間として、人間らしい生き方をしていくためには、この自分の命に込められた、母なる宇宙の思いと、願いと、祈りというものがなんたるかを知って、そして、この母なる宇宙の思いに応える生き方をする。それが人間という命をこの世界につくり出したものの意図というか、あるいは、その期待に応える人間としての本当の生き方だというふうに言わなければなりません。その意味で、どういうこの期待が、どういう祈りが、このわれわれの命に込められておるのか。なにゆえにこういう命のかたちというものをわれわれは持っておるのか。その根本原理を知ること。これが人間の格というものを理解するという、そういうこの考え方であります。**

**まず、人間には人間の格というものがある。人間の格というのを一般的な言葉で言えば、人間性、ヒューマン・ネイチャーという言葉で表現するわけであります。この人間性とはなんなのかということを考えていく。すなわち、人間が基本的に必ず持たなければならない、そういうこの避けることのできない人間としての条件とはいったいなんなのか。それをどういうふうに考えていくかということなんですけども、これは古来、そういうこの人間とはなんなのかということを考える方法論として、人間というのは、神ではない。また、動物ではない。人間は神でもなく、また動物でもないという、そういう比較をしながら、人間というのがどういう内容を持たなければならないのか。人間特有の人間性とはなんなのかということを考えていくという、そういう方法が学問的に採られてきました。**

**学問的方法という以前に、人間というものが、実際問題歴史の流れの中でどういうふうにして、自己認識という、自分とはなんなのかということを、この理解してきたかという、その流れが、こういうこの神と動物と人間を対比しながら、人間とはなんなのかということを考えていくということが、この人間が持たなければならない条件について考えていく場合の基本的な方法論なんだという、そういうこの根拠になっておるわけです。というのは、人間が最初につくった文化は原始宗教です。宗教という文化を持つことによって、人間は人間になりました。いや、他の動物とは違う命を持ったそういう存在になり得たのは、宗教という文化を持ったからです。宗教という文化は、これはなんらかの意味で、神を表現する意識というものがその根底にあって宗教は生まれてきます。その意味で、人間は神というものを意識するようになって、初めてこの動物学上の分類における人類という旧人の段階から、ホモ・サピエンスという、この人格を持つことが可能になったような、そういう新人類といわれる段階に飛躍的に進化したというふうにいわれておるわけであります。その意味で、宗教というのは、人間が人間として生きる場合の根本の文化だというふうに言わなければならないわけであります。**

**これはこの生命論からいっても、人間は何かを信じるということなしには、生きることはできません。あらゆるものを疑っておったのでは、人間は一瞬たりとも生存できない。生きるためには、とにかく信じるも、信じないもないほどの絶対的な信頼をもって空気を吸わなければならない。いちいち空気を疑っておったんじゃ、吸えませんからね。その意味で、この人間が生きる根本に、信じる力というものがなければならないわけであります。あるいは、生まれてきて、お母さんのおっぱいに吸い付く場合でも、それをいちいち疑っておったんでは生きていけませんから、無条件にお母さんのおっぱいを飲むという行為をする。そこには絶対的な信頼というものがその根底にあって、命というものが育まれていくわけであります。そういう意味で、信じる心というのは、すごく人間にとって大事なこの力だというふうに言わなければならない。そういう生きる力の根源である、何かを信じて生きるという力を与えてくれるのが宗教という文化であります。**

**そういう宗教という文化を持つことによって、人間は動物の段階から、この人格を持つような人間の段階へと進化しました。その意味で、人間にとってこの宗教というのは非常に大事な、この生きる根源の力をつくってくれる文化だというふうに言うことができるものです。そういうところから、神というものの意識が生まれてくるわけですね。そして、その神という意識を持つことによって、われわれは、自分自身を神ではないというふうな判断をしながら、自己認識という、人間とはなんなのか、自分とはなんなのかということを考えてきたというのが、実際のこの人類史の流れであります。だけども、神と対比するだけじゃなくって、われわれは、他の動植物と自分とを対比して、自分は他の動物とは違う。他の植物とは違う、特別の命だということを考え始めて、そして、動物ではない人間、すなわち、犬猫とは違う俺という、そういうものを、人間はだんだんと自覚し始めました。だから、犬猫のような扱いをされれば、なんでそういう扱いをするんだと、むかつくというね、まあ、そういうふうな気持ちになってくるわけであります。**

**そういう意味でも、われわれは人間の格というものを、どういうもんなのか。命そのものが犬猫のような扱いをされれば、それはむかつくわけですから、だから、そういう扱いをされないような自分というものになるためには、どういう内容を持てばよいのかということを、自覚的に考えていく必要が出てきます。そういうふうにして、人間は人間らしい生き方ができる、そういうこの力というものを歴史的に獲得して、今日のような素晴らしい、他の動植物ではつくれないような、文化というものをつくって、そして、その文化を享受しながら生きるという生き物になってきたわけであります。そういうこの文明、文化をつくるという根底にあるものが人間の格という、人間性といわれるものであって、あらゆるものは人間性の反映だ。すべてのものは、人間性というものを表現するものとして建築もありますし、また、さまざまな、自動車でもテレビでもなんでもかんでも、われわれがつくったものは、それはわれわれの能力と人間性の表現としてつくられてくるものですので、その外に表現したものを通して、われわれはそういうものをつくることができる人間とはなんなのかということを、知ることができるわけであります。**

**そういう意味で、まずその人間とはなんなのか、人間はどういう内容を持たなきゃならんかということを考える場合、基本的には、人間は神でもなく、また動物でもないという、そういう対比をしながら、人間の持つべき内容というものを考えて、これが学問的方法なんですね。物事の本質というものを見極めようとする場合には、比較という方法を用いなければならない。これは例えば、日本文化の本質はなんなのかということを研究しようと思って、日本文化そのものをどれだけ深く追求しても、日本文化の本質はなんなのかはわかりません。日本文化の本質がなんなのかを知ろうと思ったならば、日本文化と中国文化と西洋文化というものを対比しながら、日本文化の本質はここにあるというふうな考え方をする。それが学問的という方法論なんですね。その意味で、人間の本質、人間性、人間の格とはなんなのかということを考えようと思ったら、人間そのものをどれだけ研究しても、それはわかってきません。であるが故に、神と動物と人間を対比するという、そういうこの図式が、必要になってくるわけであります。**

**だけど、この人間と神とを対比して、そして、その人間とはなんなのかを知るという、そういうこの考え方をしていく場合に最初に乗り越えなければならない大きな問題は、神が存在するかしないかという問題です。神が存在しないとするならば、存在しないようなものと、人間を対比してどういう意味があるんだということになってきますから、まずは神が存在するかしないかという問題をクリアしなければなりません。この神が存在するかしないかという問題については、もうすでに18世紀のドイツの哲学者であるイマヌエル・カントという、有名なこの哲学者の著作、代表的な著作の中で、そのことが議論されておりまして、哲学的にはもう決着が付いておる問題なんですね。カントは、その主張の一つである、『純粋理性批判』という書物の中で、「神の存在、非存在」というテーマを掲げて、その問題について議論をしました。結果としてどういうことになったのかといったら、神が存在するかしないかという問題は、人間理性の能力の限界を超えた問題であって、わからんというのが結論なんですよ。神が存在すると断定するのも、人間的な認識においては間違いであるし、神が存在しないと断定するのも、また人間においては間違いである。神が存在するかしないかという問題については、人間の認識能力においてはわからん話だから、なんとも言うたらいかんというのが、哲学の結論なんですよ。**

**だけども、カントは、神が存在するかしないかという問題は、学問的認識の対象ではないと。だけども、これは人間の体験的な、実践的な課題であって、宗教的体験を持った人間は、神は存在すると断定するであろうし、宗教的体験のない人間は、神は存在しないと断定するであろう、というように言って、これは認識の問題ではなくて、実践の問題だ、体験の問題だというふうに、こう考えておるわけです。その意味で、カントのもう１つの主張である『実践理性批判』という書物の中で、そういうこの神が存在するかしないかという問題は、人間の生き方の深さに関係する。いわゆる宗教的体験を持つような深い生き方をすれば、神は存在すると断定せざるを得ない。そういうこの意識になってくる。だけど、薄っぺらな生き方をすれば、神なんてあるかって、そういうふうな軽薄なこの心情になってくる。**

**じゃあ、なぜ真剣に生きれば神の存在というものを求め、また必要とすることになってくるのか。その根拠はですね、人間の命というものは自分でつくったものではない。明らかに自分ではつくれない。だから、この世界には、人間の力をはるかに超えた大いなる存在があるということを確信せざるを得ない。命が存在すること自体、大いなる力と、自分というものの存在との関係性が、命そのものの中に潜在するんだ。だから、その命を持つこと、命を持ってるそのこと自体が、もうすでにこの人間の力をはるかに超えた大いなる存在、そういうものが存在するということを、この考えなければ成り立たないという、そういうものですので、どうしても人間が本当に真剣に深い生き方をするならば、自分の命の源、誰がこの命をつくったんだという、そういう問題にぶち当たらなければならない。そういうところから、この母なる宇宙というふうなですね、そういう表現もできますし、その母なる宇宙という偉大な力を、神ということもできるし、仏と言うこともできる。さまざまな超越的な存在というものを言い当てる言葉というものが、そこから考えられてくるわけです。**

**そういう意味でわれわれは、神そのものが存在するかしないかということは、学問的認識としては、なんともいえないけども、だけど、命が、神の存在というものを、この前提して成り立つものであって、その意味では、われわれは神を必要とする。そういうふうに言うこともできるわけであります。だけども、残念ながら、人間の理性の能力というものは、神が存在するとかしないとかということについて、断定的な結論を出すことができるような能力ではない。これはなんでかといったら、理性という能力は、物事を外から客観的に眺めてみて、そして、こうだああだと考えて結論を出すのが理性なので、だから、理性という能力は、客観的、対象的、あらゆるものを対象化して考えるという、そういうふうな能力だという、そういう限界があります。**

**だから、われわれも宇宙の中におったのでは、宇宙全体がどんなもんなのかは永久にわからないわけですよね。宇宙がどんなもんなのかということをちゃんと知ろうと思ったら、宇宙の外に出て、宇宙を外から全体を眺めてみるという、そういうこの視野を持って初めて宇宙はこうだと言えるんです。宇宙の中におったのでは、宇宙がどんなもんなのかはわかりません。それが理性の働きで、理性というのは、物事を客観的に対象化して見ることによって、こうだ、ああだと判断できるという能力なんですね。であるが故に、われわれは宇宙の外にも出られない。ましてや宇宙をつくった神がどんなもんなのか、わかるはずはない。そういうことで、理性というこの認識能力からするならば、神が存在するかしないかという問題は、これは結論が出ない。なんとも断定的なことを言うたらいかんというね、まあ、そういうことになってくるわけであります。**

**じゃあ、この感性論哲学は、あるかないかわからんような、神と人間を対比するのかという、そういうことになってくるんですけども、そうではない。感性論哲学が、神というものを問題にするのは、あるかないかわからんような、また、体験がなかったらわからんような、そういうこのものとして神を扱うのではない。感性論哲学が神というものを取り扱う、その根拠はどこにあるかといったら、神そのものは存在するかどうかわかりませんけども、だけど、神という言葉が存在する。この事実は誰も絶対に否定することはできません。例え無神論を語る人間すら、神という言葉を使わずして無神論を語れない。その意味においてはですね、人間という存在は、神という言葉から逃れることはできないんだ。人間であるならば、神が存在するかしないかにかかわらず、人間であるならば、必ずどんな人も神という言葉を持っておる。神という言葉を持っていなければ、人間ではないんだ、そういうふうに、文化人類学という学問からは言えるわけであります。**

**そういうふうに考えていくと、神という言葉が存在するという、この事実は誰も否定できない。この誰も絶対に否定できないものを根拠にしないと、学問というのは成り立ちません。その意味で、感性論哲学が人格論という人間の格を語る根本の、誰も絶対に否定できない根拠はどこにあるかといったら、神という言葉が存在する。これが、誰も絶対に否定できない事実である。そこから、感性論哲学は人間とはなんなのかを考えていきます。神という言葉が存在するという事実は、誰も否定できないということを根拠にして、神について考えるという、この論理は、感性論哲学が初めて開発した新しいもののこと、神についての考え方で、15年ほど前ですけど、私が東京でこの人格論の話を講演したことがあったんで、そのときちょうど、青山学院大学の神学部の助教授の方が聞きに来ておられて、神という言葉の存在を根拠に神の存在について論証していくという方法はまったく初めて聞きましたと。そう言われてみれば、聖書には、初めに言葉ありきと書いてあると。初めに言葉ありきという言葉は、人間が神について考え、アプローチしていくためには、この神という言葉を原理にし、根拠にしながら、神に到達しなければならないという、そういう意味で初めに言葉ありきという言葉を神は人間に対して発してくれたんだという、そういうことが、私の話を聞いて初めてわかった、納得できたといって、非常に喜んで会いに来られたんですけど。**

**だいたい宗教学というのは、神の存在を前提して始まるので、神が存在すると前提しなければ、宗教は成り立たないし、宗教学は成り立ちませんので、神の存在を論証するということは、これは宗教学のらち外にある問題でした。だけども、哲学の観点から、私が神という言葉の存在は誰も疑い得ないと。そこから、この人間は神という存在に到達することができるという新しい道を宗教学に開いたもんですから、その意味で神学部の助教授の方は感動されました。神という言葉の存在というものが人間にはある。このことを、われわれ自身も、もっともっと重要なものとして考えなければなりません。なぜわれわれは、神という言葉を持っておるのか。それは、命そのものの中に、超越的なる存在によって、この命がつくられたという事実的な根拠があるから、そこから神という言葉は浮かび上がってくるんだということですね。命は自分でつくったものじゃない。命の中に、そういうこの超越的な存在と、私という関係性が命を成り立たせておる、その根拠の中に存在する。いわゆるその命というのものは、すでに神を内含しているというかね、含んでるという、そういうふうな構造になってて、初めて命は誕生できるわけであります。**

**その意味で、まずは神という言葉の存在というものを根拠にしながら、神について考えるということをしなければならないと。神という言葉が存在するということは、どういうことなのかといったら、言葉が存在するということは、それを意識しながら生きておるということの証明であって、言葉が存在しないということは、それを意識していないということの証明であります。そこで、人間であったならば、神という言葉を持っていない人間はいないというのが、文化人類学上の研究結果としてわかっておることなんですけども、じゃあ、人間であるならば、神という言葉を持っていない人間はいないということは、人間はみんな神を意識しているんだと。神が存在しないにしても、神という言葉を持っておるということは、無神論者でも、神を意識してるんだというふうに言うことができるわけであります。**

**じゃあ、いったいどういうものとして、われわれは神というものを意識しておるのかということを考えなければならない。近代宗教学においては、神というのは、完全かつ、絶対なるものという意識しております。神が絶対かつ、完全という、そういうものとして理解される、意識されるという、そういうことから、われわれは、自分は神ではないと、こう思ってますので、そこから必然的に、人間は不完全だという自覚が芽生えてくるわけであります。なぜ人間は不完全と言わなければならないのか。その根拠はこういうこの論理の流れにあるわけですね。こういう論理を無視すれば、人間も母なる宇宙においてつくり出された存在なんだから、人間は人間として完全じゃないかという論理も成り立つわけであります。だけども人類が、人間とはなんなのかという自己認識に到達する、この長い歴史の流れを考えた場合、われわれは、この神という言葉を持つことによって、人間になったという事実がありますので、原始宗教という文化をつくることによって、人間は動物の次元から脱却したという事実がありますので、そのことを根拠にしながら、人間について考えるということをすると、必然的にわれわれは自分を神ではないという仕方で自分を考える、考えてきたということからですね、神は完全であったならば、われわれは神ではない。だから、不完全だという、そういう自覚が必然的に芽生えてくるんだというふうに言えるわけであります。**

**そういうこの歴史的事実を無視すれば、人間も神によってつくられたんだから、人間は人間として完全だと言っていいんじゃないかと、そういう議論も成り立つわけなんで、実際、そういうふうなことをおっしゃってる方もいらっしゃいます。だけども、人間が人間として生きていく。すなわち、母なる宇宙の思いに応える。母なる宇宙の祈りと願いに応えるという、そういう生き方をしていくためには、われわれは不完全という、こういう意識を持つことが、人間が幸せになる根本の原理である。人間が成功する根本の原理である。そういうふうに、この考えなければならないという、そういう道筋が生まれてくるわけです。そういうふうに考えていったら、人間が本物の人間として、人間の格を持った人間として生きてく根本の原理はなんなのか。それは不完全性の自覚であるというふうに言うことができるわけです。あらゆる物事、あらゆることにおいて、人間は不完全だという自覚を持つことが、人間として最も根本に置かなければならない人間的な意識というふうに言うことができるわけです。**

**なぜそれが、人間として持たなければならない根本の意識と言えるのか。それは、この不完全性の自覚、俺は不完全だという意識を持つことができるのは人間だけであって、神にも、動物にも持てない自覚だ。神が自覚を持つならば、俺は完全だという完全性の自覚でなければならない。うっかり神様が、間違ってしまったりなんかしちゃったりなんかしてね、人間が持てるような自覚を、俺が持てないはずはあろうかなんていうようなことを考えてしまったりなんかしちゃったりなんかしてして、その神様が不完全性の自覚なんて持ってしまったら、神でなしになっちゃいますからね。そういうわけにはいかんのだ。神様が自覚を持つならば、完全性の自覚でなければならない。神様は不完全性の自覚なんていうのは持てるはずがないし、持つはずがない。動物はどうか。動物は人間と同じように神と対比すれば、動物も不完全で有限な存在なんですけども、だけど、動物は人間のように完全なる神を意識することはできない。だから、動物は、俺は完全ではないというふうな、そういう意識を持つことができない。人間だけが不完全でありながら、完全なるもの、神を意識することができる。であるが故に、人間だけが俺は完全ではないという意識を持つことができるんだ。不完全性の自覚は、人間しか持ち得ない、神にも動物にも持ち得ない、人間特有の自覚である。**

**であるが故に、人間が人間としてこの人生を生き、仕事をしていく場合、根本に持たなければならないものは不完全性の自覚である。どんなに完璧に仕事をしておっても、何か落ち度があるんじゃないかという、そういう危惧というか意識を持つことが、この人間的に非常に重要なことであって、このまったく落ち度がないと思ってしまったら、それは傲慢になってしまうし、またそのことによって、人間はいろんな失敗をしてしまうようなことになってしまうので、何かしら落ち度はないかという、そういう危惧を持つことによって、いろんなことに気が付くというそういう成長を遂げることもできるわけであります。まあ、とにかく、この不完全性の自覚というものが、まずはですね、人間が人間としての格を持つために、根本に要求されるものである。だけど、不完全性の自覚が自覚にとどまっておったのでは、それは単なる観念であり、知識に過ぎない。だけど、人間性というのは、単なる知識じゃない。人間性は命に染み込んだ力であって、人間性というのは、命からにじみ出てくるようなものでなければならない。**

**であるが故に、不完全性の自覚が単に自覚で不完全なんだということを意識しているのでは、まだそれは身に付いてない。単なる知識に過ぎない。不完全性の自覚が身に付いて、命に染み込んで、そして、本当にその自分のものになれば、どうなるかといったら、結果として、不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さがにじみ出てくる。この謙虚さがにじみ出てきて、初めてこの不完全性の自覚は身に付いた、人間性になったというふうに、言うことができるわけであります。その意味で、人間がまず基本的に人間の格として持たなければならないものが、不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さという心であります。謙虚さのない人間は、人間であることを根底から失格をする。実際問題、多くのですね、人間が、この社会的に非難され、また地位を追われるのは傲慢さ故である。傲慢さほど、人間にとって恐ろしいものはない。傲慢になったとき、人間は人間であることを根底から失格するのである。その意味で、不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さというものを、まずわれわれは、自分のものにしなければならない。**

**では、具体的に人間がこの謙虚な心を持って生きるという、自分というものをつくっていくためには、どういう努力をしたらよいのかということを次に考える必要があります。お客さんと言い合いになってしまうのも傲慢さ故だ。夫婦げんかをするのも傲慢さ故だ。幼児虐待も傲慢さ故だ。人間関係の破綻は、すべて根底にこの不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さが欠如しておるというところから、人間関係の破綻は生まれてきますし、また仕事の失敗も自分の問題点、不完全さに自分自身が気が付いていないということによって、仕事上の失敗も生まれてくるわけであります。どういうふうにすればこの謙虚さという、そういうこの気持ちが自分の中に出てくるか。そのことを次に考えなければなりません。**

**謙虚さをつくるための基本的な原理というのは、大きく言って２つ、もうちょっと言って３つほどあるんですけども、その人間が不完全性の自覚というものを持って、謙虚さというものがにじみ出てくる人間性を持つために、まず第１番目に要求されるのは、人間はどんな人間でも、長所、短所半分ずつなんだ。どんな人間でも、短所は半分ある。長所も半分あるけど、短所も半分ある。どんな立派な人間でも長く付き合えば、必ず他人から非難され、軽蔑され、また嫌がられるところを半分は持っておるんだ。また、どんなこの人間でもですね、他人よりも優れたところを半分は持っておる。そういうこの意識で、われわれは人に対さなければなりません。現実的には、非常に能力の劣った人もおるわけですけど、人間は潜在能力においてはね、必ず他人よりも優れたところを半分は持っておる。またどんな立派な人でも、他人よりも劣っているところを半分持っておる。そういう人間認識をまず持たなければならないということですね。だから、どんなこの人と対する場合でも、その人を見下げるような、軽蔑するような意識や目で人に接してはならない。どんな人と接する場合でも、この人の中には、自分よりも優れたところは半分はあるんだ。潜在能力においては、その可能性を皆持っておるんだ、そういう意識で人には接しなければなりません。**

**どんな人と会う場合でも相手から見たら、自分の中にも必ず嫌だなと思うところ、非難したくなるところが、自分の中には半分はあるんだ。そういうふうな意識で人と対するという自覚が必要であります。なぜ、いったい人間には長所短所半分ずつあるというふうに言わなければならないのか。多くの方々が、人間は不完全というようなことは、もう常識で知ってますから、だから、俺は完全ではない、俺にも短所はあると。だけど、半分もないやろうと思ってる人が多くて、ちょっとはあるけどね、半分もということはないやろうと思ってる人が、案外と多いわけです。だけど、現実的には、また原理的には、半分あると考えなければなりません。それはなぜかといったら、人間も宇宙の中に存在する一個の命である。だから、人間は宇宙の摂理の外には出られないんだ。宇宙の摂理とはなんなのか。宇宙の摂理というのは、マイナスに評価されるエネルギーとプラスに評価されるエネルギーが、エネルギーバランスを模索しながら、宇宙の秩序を形成している。これが宇宙の摂理といわれる現象であります。そういう力によってですね、宇宙は万物をクリエートしておるわけであります。**

**ですから、宇宙の中に存在するあらゆるものの基本的なあり方は、調和作用、バランス作用、平衡作用というバランスを取るという、そういう働きが宇宙の中に存在する、あらゆるものの基本的なあり方です。だから、人間の命も左右対称に近い、シンメトリーに近い構造になっておる。だいたい、星が丸いのも３次元という空間の中で完全な調和を取ろうと思ったら、円になるんですよね。球体、ボールになるんですよ。あれが調和の最も究極の姿なんですね。立体、３次元という構造の中ではね。そういう意味で、宇宙の中に存在するものは、みんなそういう調和作用、バランス作用、平衡作用という機能を根底に与えられておるし、それを持つことによって、初めて宇宙の中で存在できる。だけど、バランスを取ろうと思ったら、両極端の、両極のこの相対立する原理がなければならないと。でないと、バランスが取れません。まあ、その意味で宇宙の構造というのは、プラスにはマイナスがある。約半分ずつある。表には裏がある。表と裏は両方あるのであってですね、裏のほうが表よりも少ないというのは、そんな紙はありません。一枚の紙があったならば、表と裏は同量あるんですよ。でなきゃ、存在は成り立ちません。光には影がある、上には下、右には左、前には後ろね、善には悪、美には醜、真には偽、清には濁。あらゆるものは、一対という、この対という構造で成り立っておるのであってちゃんとバランスを取るような構造で、あらゆるものは存在しておるわけであります。**

**だから、人間もだいたい男と女は半分ずつ、だいたいそういうバランスで成り立っておる。なんで人間はなんにも考えないで勝手にセックスしておってもちゃんと男の子と女の子が半分ずつ出てくるんだ。これは人間も宇宙の摂理が、その命を支配しているからであります。それが人間の社会というものをね、宇宙の摂理が支配してるということの具体的な実証であります。だから、われわれでも、栄養を取るのでも、空腹、満腹でね、バランスを取って、ちゃんと栄養を取ってますしね。神経系でも、交感神経、副交感神経でバランスを取る構造になってます。あらゆるものは、バランスを取るという働きで成り立っておる。そのためには、一対の、相対立する原理が必要であるけれども、だけども、この対立する原理は、対立してるんじゃなくて、協力してるわけです。プラスとマイナスが協力しながら、宇宙の秩序をつくってる。まあ、そういう構造になっておるわけであります。そういうふうに考えると、人間性というものも、これは、この人間も宇宙によってつくられた一個の存在ですので、バランスを取るという構造で命というのは成り立ってます、だから、長所短所は半分ずつ与えられてるという構造になっておるわけであります。だから、どんな人間でも、長所も短所も半分ずつあるんだという自覚を持っていなければなりません。そして、宇宙はプラスもマイナスも両方とも活かしながら、それを協力させながら存在しているというのが宇宙ですから、われわれも宇宙の中におるんですから、われわれも宇宙の一部分なんですから、われわれも宇宙と同じ生き方をしなければなりませんし、宇宙と同じ存在の仕方をしなければ、宇宙の中におることはできません。**

**じゃあ、どういうことをしたらいいんだといったら、われわれも長所と短所を共に活かし切らなければならない。共に活かせなければ、人間ではない。長所を伸ばして、長所を磨いて、人の役に立つ能力をつくって、そして、その存在感のある自分になる。それから、短所はですね、短所も長所も、これはなくならない。半分ずつあってなくならないんですから、短所をなくそうとする努力をしてはならない。だけども、短所はあっていいんだといって、開き直っちゃったんじゃ、これは人間としては愚かな生き方であって、短所が半分ある、俺の短所はどこなのかということをちゃんと自覚し、知る努力をすることがですね、短所を活かす道であります。**

**俺の短所はここだということを知ることによって、自分自身の謙虚な心をつくる。人間の本質は心といわれますけども、人間らしい心とは謙虚な心だ。謙虚な心をつくってくれるのは長所じゃない、短所だ。謙虚な心という人間らしい心をつくってくれる基本原理は長所ではない。短所だ。短所が人間らしい謙虚な心をつくってくれるのである。だから、われわれは、短所をなくす努力をしてはならん。それは、命を苦しめることになってしまう。短所をなくす努力をするんじゃなくって、俺にはこういう短所があるんだということをちゃんと知って、そして、そのことによって、謙虚な心をつくる。だけども、短所が出てくれば、他人から嫌われてしまう。短所が出てくれば、仕事で失敗する。だから、短所はなくならないんだけど、あんまり出てこないように注意をするという生き方をしなければならない。短所はなくならないからですね、なくそうとする努力をすると、宇宙の摂理に逆らったことになりますから、命は苦しみますよ。つらくなります。そして、基本的には病気になります。短所をなくそうとすると病気になります。**

**だからって、あっていいんだと開き直っておったんじゃ、これは無自覚な、非人間的な生き方である。大事なことは、短所はなんなのか。自分の短所はなんなのかということをちゃんと知って謙虚な心をつくる。だけど、短所が出てくれば、嫌われてしまって、仕事も失敗しますから、短所はあまり出てこないように注意をする。それは相手に対する心遣いであり、思いやりであり、愛だ。短所を知るための努力をしなければならない。短所が出てこないように努力する必要がある。だけど、短所はなくならないんだ。どんなことでも、プラス面とマイナス面がありますので、あらゆる事柄をマイナスに評価すると、人生は駄目になります。自分の身の回りに起こる出来事を、自分の人生にとって、自分の仕事にとってプラスに解釈する。その力が、人生をよりよい方向性に、成功へと導いていくんです。これは自分にとってマイナスだと思ったら、事柄はマイナスに転換し始めて、自分はだんだん落ちぶれて駄目になります。これは自分にとってよかったと判断すれば幸せになり、また現実はいい方向性に動いていって、自分も成長できます。どんな物事にもプラス面とマイナス面がある。これは、絶対になくならないんだ。だけども、そのマイナス面の影響を受けてしまって、これは自分にとってマイナスだという、そういう意識を持ってしまったら、自分は不幸になってしまうし、自分はだんだん、だんだんとこの落ちぶれていくというか、事態がマイナスのほうに動いてしまいます。その意味で、プラス面、マイナス面あって、これは両方ともあるものなんだけど、だけども、それをどういうふうにプラスに解釈するか。どうマイナスを生かしていくかということを考えなければならない。**

**失敗は成功のもとと申しますけど、さまざまな問題や悩みが起こってくる。それはマイナス面なんだけど、なぜ失敗や、悩みや、問題が起こるのか。それは自分を成長させてくれるためだ。失敗という、失敗したというこの自覚が、どういうことに気を付けたら、そういう失敗がなくなるのかということを自分に教えてくれて自分を成長させてくれる。問題、悩みは自分を成長させるために出てくるんだ。問題、悩みはなくならないんですよ。一生、問題、悩みはなくなりません。いつの時代でも、問題や悩みは存在します。それが社会を発展させるんです。いつの時代でも、犯罪はなくなりません。犯罪をどんだけなくそうとしても、宇宙の構造がその善悪半分ずつという構造になってるんですからね、だから、犯罪はなくなりません。事故もなくなりません。だけど、それがあるから、社会は発展するんです。技術も成長するんです。**

**石川五右衛門先生がおっしゃってるように、「浜の真砂は尽きるとも世に盗人の種は尽きまじ」。悪はなくならないんですよ。だから、社会は発展するんですよ。病気も、これはさせてもらってる。何か君の生き方や、心の持ち方や、何かどこかに宇宙の摂理に反する、何かしら作為に陥った問題点があるぞ。そのことをですね、この宇宙は教えるために病気にしてくれるんですね。それに気付いたら、どんな病気でも治るんです。宇宙の摂理というものを自分が自覚して、そして、その宇宙の摂理にのっとった生き方をするという、そういう意識を持つことによって病気は治癒する。そういう構造に命はできてるんです。命というのは、生きる力です。それをつくったのは宇宙です。だから、宇宙の摂理に反しなければ、どんな病気でも治るというか、生きるようにできておるのが命というものです。だけど、みんな宇宙の摂理に反するような無自覚な、あるいは、ゆがんだ生き方をしてしまうので病気になってしまうんです。とにかく病気というものも、自分を成長させるためにね、何かを教えてくれる、そういう現象なんだというね、受け止め方をしなければなりません。**

**それがマイナスを活かすという、問題点、問題を活かす。そういうこの方法であってですね、だけど、問題はなくなりません。だけど、問題は何かを自分に教え、自分を成長させるために出てきてくれる存在であります。そのことによって、われわれは賢くなる。また、問題を乗り越える努力をすることによって、潜在能力を引き出して、自分の新しい力をつくっていくことができる。まあ、そういうこのことになってくるわけですね。まあ、とにかく人間は、どんな人間でも、長所、短所、半分ずつある。短所の自覚、自分の短所はどこなのかということをちゃんと知って、そして、そのことによって謙虚な心をつくって、だけど、短所が出てくれば嫌われるから、あんまり出てこないように注意をする。それだけでは、まだ短所は完全に活かし切れてはいません。もっと大事なのは、短所をさらけ出す勇気です。短所をさらけ出して、俺の駄目なところはここなんだとみんなに言って、だから、みんな助けてくれって言って、助けてもらって、そして、ありがとう、君はすごい力を持ってるね、大したもんだねと言って、相手を褒める。そして、助けてもらって、感謝をする。恩を感じる。短所を隠すんじゃない。失敗を隠すんじゃなくってですね、短所をさらけ出して、失敗をさらけ出して、助けてもらう。助けてもらうことが、また人間として立派な行為なんだ。**

**短所をさらけ出さないで、失敗をさらけ出さないで、隠してなんとか言い逃れをしようとする。これこそ人間として醜い行為であります。失敗したことがわかったならば、堂々というわけじゃないけども、勇気を持ってそれをさらけ出して、助けてもらうことが大事です。そうしないと、会社はやっていけません。助けてもらって、みんなに力を借りて、そしてお客さんに万全の対応をしていく。そのためには、失敗をさらけ出す勇気を持たなければならん。隠したらいかん。助けてもらって、ありがとうといって、お互いに感謝し合いながら仕事をしていく。それが人間、不完全な人間がつくり出す有機的組織というもののですね。助け合い、相互補完的構造という、宇宙の摂理を体現した組織のあり方です。宇宙はお互いに足らざるところを補いながら、助け合いながら、相互補完的関係で成り立っているんです。われわれは宇宙におるんですから、そういう生き方をしなきゃいけません。短所をさらけ出さなかったら、人間ではないんだ。短所をさらけ出さなかったら、宇宙ではないんだ。お互いに相互補完的関係で成り立ってるんですから、短所をさらけ出さないと、相手から助けてもらうという、相互補完的関係をつくれません。**

**みんな短所を持ってるんですから、それを隠したらいかん。短所をさらけ出して、助けてもらって、ありがとう、君はすごいね。大したもんだねといって、その相手を褒めたたえる。そして、助けてもらって、恩を感じる、感謝をする。そういう行為は活人力というんです。活人力。相手の存在を輝かせる行為。自分だけが輝こうとしては、自己中心性に陥る。社会というのは、自己中心性と他者中心性のバランスなんだ。自分だけが輝いただけでは、人間として半分だ。人間性において半分だ。人を輝かせる力を持ってですね、初めて人間として価値ある存在になることができる。人を輝かせようと思ったら、自分の短所をさらけ出さなければならない。俺の駄目なところはここなんや。助けてくれよと言わなければならない。**

**社長さんは、どんな立派な社長さんでもね、会社の仕事全部は自分ではできません。ということは、社長さんは社員に助けてもらってるんです。また、社員も社長さんに助けてもらってるんです。これが宇宙の関係です。全部は自分でできません。お互いに相互補完的関係で感謝し合うという構造がなければなりません。能力においても、人間性においても、お互いに助け合うという構造が宇宙です。それが相互補完的関係なんですよね。それがパートナーシップというね、まあ、そういうこの生き方になってくる。長所を磨いてね、人を助けてあげることも立派ですけど、短所をさらけ出して、人に助けてもらうことも立派な行為です。それがなかったら、人間ではありません。助けてもらわなければ、人間ではありません。助けてあげることと助けてもらうことは、同等の価値がある素晴らしい行為です。だからって、失敗していいということじゃないんですけどもですね、できるだけ短所は出てこないように注意をせんといけません。だけども、人間は不完全ですから、失敗をしてしまうことが多々あります。そのときは、それを隠さずに、それを堂々とというわけじゃないけども、臆せずに、その失敗をさらけ出して助けてもらって、早くそういうこの失敗を補って十分な満足を、お客さんや取引先に与えていく。そういうふうな努力をすることが有機体というものが持っておる相互補完的関係という仕方でのあり方です。**

**残念ながら、まだまだ短所をさらけ出す勇気というものを評価する組織は少ないです。ついつい短所は隠して何事もなかったようにしてしまう。理性でこの完全性を要求する古い組織の体質になっておる場合が多い。だけども、人間的な組織というのは、人間は不完全なんだ。失敗をするんだ。失敗していいわけはないけども、完璧を期しても失敗するんだ。そのときは、その自分の失敗をさらけ出して、助けてもらってね、そして、相互補完的関係で、全体としてちゃんと問題のない対応をしていこうとする。そこに有機体というね、そういうこの組織のですね、あり方があります。自分だけでは完璧になれませんからね。宇宙も相互補完的関係で、宇宙は完全なんですよ。人間も相互補完的関係で完全になるというね、そういうこのあり方で大丈夫です。だから、無理をする必要はありません。失敗したら、早くそれをさらけ出して助けてもらってその失敗をちゃんと取り戻していく。そういう組織が有機体という組織ですから、そういうことが非常に大事なこと。そのためには、助けてもらうことも立派なことなんだということを忘れてはならない。**

**助けてもらおうとしないことは傲慢なんだ。助けてもらおうとすることが謙虚さなんだ。助けてもらって、感謝をする。助けてもらわなければ、恩を感じることはできない。感謝ができない。短所がなかったら、美しい心はできないんだ。美しい心とは、感謝する心。恩を感じる心。尊敬する心。相手を褒めたたえる心。それは短所がつくってくれるんだ。人間にとっては、短所は決してマイナスではない。自分自身を成長させるために、非常に大事な要素として母なる宇宙が与えてくれたもんだ。宇宙そのものが、マイナスという短所を持ってるんです。だけど、プラスとマイナスでバランスを取って、完全という秩序をつくっているんです。だから、われわれも、それを見習わなければなりません。お母さんがそうしてるんですから、子どもなんだから、それを見習わなければならないですね。とにかく組織においてはね、助けてあげることも立派だけど、助けてもらうことも立派なことなんだというね、助けてもらって、感謝をすることが立派なことなんだ。助けてもらうことは、相手の存在を輝かせる活人力だ。人間性、人間的な生き方というものをこれから人類は覚えていかなければなりません。**

**だけど、まだまだほとんどの人間は短所を隠します。失敗を隠します。犯罪を隠します。問題を隠します。それがあらゆるものが悪くなる原因です。企業において、問題や失敗を隠すということをすれば、企業は犯罪の温床となり、また消費者から非難されるというような、そういうことになって、会社はつぶれます。お客さんからいただいたクレームは、隠さずに堂々と社内で公表して、それにどう対応していこうかということを考えていくことが、この人間として謙虚な、しかも、より完全な対応をみんなが力を合わせてやっていくという、そういう道筋になってくるわけですから、その意味で、クレームを恐れてはなりません。失敗しても決してそれをマイナスとして受け止めるんじゃなくって、そのことによって助けてもらえる。助けてもらって、感謝ができる。また失敗をすることによって、また自分も成長できる。そういうふうなですね、プラスにそれを転換していって、失敗すら活かしていく。それが宇宙がやっていることですから、われわれもそれをしないといけません。それが相互補完的関係というね、パートナーシップという、この関係性のあり方です。**

**そういう意味で、まずは人間には長所、短所、半分ずつあるんだ。どんな人間でも、他人から非難され、軽蔑され、嫌がられるところを半分は持っておる。これはもう避けがたい宿命なんだ。だからといって、半分短所があっていいといって開き直ってしまったんでは、これは人間として無自覚であってですね、その存在を知らなければね、これは人間らしい生き方という、心をつくっていくことはできません。短所があることを知って、何が短所なのかを知って、そのことによって、この謙虚な心をつくっていく。そして、短所が出てこないように注意をする。そして、短所をさらけ出して助けてもらう。そして感謝をする。人を褒める。それが短所を生かす道なんですね。よくプラス思考と申しますけどね、マイナス面をプラス面にしてしまう。そのことによってマイナスがなくなると思ったら、これはとんでもないですね、間違いであってね、マイナスはマイナスなんだけど、それをどう生かすかということがね、プラス思考なのでね、短所はなくなりません。その短所を使うことが、短所の存在を活かすことが大事なのであって、あらゆることをプラスに転換していく。これはある意味で、軽薄な生き方です。**

**どんなものにもマイナス面とプラス面があるんだということを知っておることが大事な認識であって、どんなに素晴らしいことをしても、そのことによって誰かが迷惑を被ってる、誰かが不利益を被ってる、そのことを見逃さないということが、人間らしい意識であって、いいことをしたんだから、いいことをしたんだと思っておったんじゃ、浅いんですよね。どんなにいいことをしてもですね、そのことによって誰かが悲しんでないだろうか、誰かに迷惑が掛かってないだろうか、そういうことを思うことが人間らしい心というふうに言うわけであります。**

**キリスト教的な表現をするならば、どういうことになるかといったら、人間における善良さとは、罪を犯さないことではない。人間における善良さは、罪の意識をなくさないことだ。俺は何も悪いことなんかしてないぞというのは、これは人間としては間違った人間だと。罪を冒さないことが立派な人間であったり、正しい人間であったり、よい人間であるのではない。人間として立派な人間というのは、罪の意識をなくさないことなんだ。どんな立派なことをしても、ひょっとしたら、このことが誰かに迷惑になってるんじゃないか。ふとそういう気持ちが自分の心をよぎる。そこに善良さがあるわけであって、いいことをしたんだ。これは能天気なですね、軽薄な、薄っぺらな人間だと。**

**だから、イエスはいわゆる立法主義者という、自分はモーゼの十戒、神との約束を完全に守ってですね、間違ったことはしていない。そういうこの立法主義者という法律を守って生きる人間を罰するわけです。そして、守ろうとしても、法律を守ろうとしても守れません、悲しいかな守れません、だから、助けてくださいといって神にすがる。そういう罪人を、イエスは救われる。自分がつくった、まさに人間らしい人間だ。不完全性の自覚を持った本物の人間だといって、罪の意識を持った人間を救われるというのは、イエスの信仰、キリスト教の信仰の神髄であります。だから、どんなに素晴らしい仕事をしても、何か問題があるんじゃないか、どこかに不満があるんじゃないか、そういう気持ちが人間を成長させるし、それが人間として立派な心遣いということになってくるわけです。俺は完璧にやったんやと、そういうこの傲慢さを持っては組織もうまく成り立ちませんし、また仕事においても軽薄な浅い意識を持った仕事しかできません。そういう意味で、人間が人間らしい人間としての格を備える基本は、不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さ。このにじみ出る謙虚さをつくっていくための１番目の原理は、人間はどんな人間でも、長所、短所、半分ずつあるんだ。この原理をどう活かし切ってですね、自分を成長させていくか。まあ、そこに第１原理があるわけですね。**

**では、不完全であれば人間かというと、そういうわけではない。まだ不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さを持ってるだけでは人間の格の３分の１に過ぎない。まだそれだけでは人間ではない。謙虚さだけじゃ人間じゃない。謙虚、謙虚、謙虚、謙虚って、なんとなく鳥が鳴いてるみたいですからね。謙虚さだけじゃ、まだ３分の１、あと２つあるんですね。次はなんなのかといったら、確かに謙虚さは根本において人間性を表現する最も大事な原理だけど、だけども、不完全性の自覚というのは、完全なるものを意識するところから出てくる。だから、人間は不完全であるという存在論的な規定を持っておるんですけど、不完全性という存在論的な規定を持っておるんですけど、だけど、人間は不完全でありながらも、完全なるものを意識できる。ここにまた人間の、人間にしかできない大事な意識があります。不完全でありながら、完全であるものを意識することができる。だから、人間はみんな不完全なんだけど、もっと金が欲しい、もっといい家に住みたい、もっといい車に乗りたい。まあ、そういう、もっともっとという気持ちを人間はみんな持つわけであります。**

**不完全でありながら、完璧を求める、完全を求める、絶対を求める。それはまた人間の避けがたい意識の構造なんですね。だけど、人間は絶対、完全にはならん。完璧にはならん。絶対にはならん。だけど、人間は絶対を求める、完全を求める、完璧を求める。そこにまた人間特有の生き方というのが生まれてきます。この完全にはならんけど、完全を求めるという生き方を、より以上を目指して生きるという、そういうふうに表現します。より以上を求めて生きる。その意味で、第２番目に人間が人間の格として持たなければならない重要な人間性は、より以上を求めて生きる、より以上を目指して生きるという、そういうこの生き方、力です。これをこの違った言葉で意志というんですね、Will。Willというのは、より以上を求めて生きるというね、そういうこの力を体現した能力であります、意志。意志の力、不撓不屈の意志。どんな困難でも乗り越えていくぜという、そういう不撓不屈の意志を持って生きる。そこにまた人間としての立派さというのが出てくるわけですね。**

**なぜ、より以上を求めて生きるということが第２番目の人間としてのこの本物の印、人間として持たなければならない人間性の、人間特有の第２番目の条件と言えるのか。それは、より以上を求めて生きるということも、これは人間にしかできないことなんだ。神も動物もできないんだ。神にもできないんだ。なぜならば、神様は完全かつ絶対である。だから、より以上を求めて生きてごらんになったといって、もう絶対完全なんですからね、どうすりゃええのって神様、困りますからね。残念ながら、神様は、完全かつ絶対という存在領域に固定されてしまっておって、上にもいけない、下にもいけない。完全じゃなくなってしまったら、神でなしですから、上にも下にもいけない。神様はかわいそうですけど、完全かつ絶対という存在領域に固定されてしまっておる。動物はどうか。動物は人間と同じように不完全かつ有限な存在ですけど、だけど、動物は、神を意識することはできない。完全なるものを意識することはできない。だから、動物は不完全でありながら、完璧を目指すというふうな生き方はしないんだ。できないんだ。人間だけが不完全でありながら、完全なるものを思い描くことができる。だから、人間だけがより以上を目指して生きるという生き方をしようと思ったらすることができる。しようと思ったらすることはできるんだから、せんないかん。したら本物だ。そうしなきゃ偽物だというね、まあ、そういうふうな判断ができるわけであります。**

**なんらかの点で、なんでもいいからとにかくは、より以上を求めて生きる。金が欲しいでもいい。もっといい家に住みたいでもいい。もっといい車に乗りたいでもいい。もっといい彼女が欲しいでもいい。もうとにかくは、より以上というものを求めて生きるということをしておったら、人間的と言えるわけであります。それは人間にしかできないことだから。そういうこのより以上を求めて生きるというのを意志と言うんですよね。そういうより以上を求めて生きるという意志の力を、われわれが自分のものにしようと思ったら、具体的にはどういうこのことをするのかといったら、どこまでもより高度なもの、より厳密なものを求めていきたい。どこまでも、より善なるもの、より美しいもの、より真なるものを求めていきたい。まあ、そういうこの価値への情熱、価値への要求、それは人間的な心と言うんです。われわれが人間らしい心を持って生きていこうと思ったら、この価値への情熱、価値への欲求、どこまでもより高度で厳密なものを追求したい。そういう思いを持って仕事をしていなければ、人間的とは言えない。**

**どこまでもより真実なるものを追求したい。どこまでもより善なるものを追求したい。どこまでもより美しいものを追求したい。その心が人間的といわれるもので、それが人間の品格をつくる原理なんですね。真善美を求める心が人間の品格をつくる。より以上を求めて生きるという価値を追求するという、価値への情熱がなかったならば、人間に人間らしさ、品格というものが、格が生まれてこない。ではより以上を求めて生きるというものを具体的にやっていこうと思ったら、どういうこの原理が要求されるのか。そのためには、より以上を求めて生きようと思ったら、われわれは理想というものを持っていないといかん。理想がなかったら、より以上を求めて生きるという生き方は生まれてきません。理想を持って生きるということが具体的により以上を求めて生きるという、そういう生き方をつくり出す基本原理です。**

**何がしたいのと言われて、いやあ、べつに大して何もしたいことはありません、それじゃ、人間らしい生き方はできません。したいことがなかったら、他人に与えられたことをさせられてしまう。他人に与えられたことをするのは奴隷だ。人間ではない。人間であるならば、基本的に自分の肉体だけは、自分の意志と決断で動かさなければ人間的とは言えない。自分の肉体が他人の意志に支配されたら奴隷だ。だけど、会社というところは上司の命令に従って、経営者の命令に従って動かなければならない。じゃあ、俺は奴隷かというと、そういうことでは奴隷なんですけど、だけど、人間としてこの会社の中で働くためには、上司の命令を、ただ命令されたからやったんだという、そういう受け身で考えてしまうんじゃなくって、俺もそう思う、俺もそれが正しい、俺もそうするべきだと思ったから、俺はやったんですという意識で働かなかったら、人間として働いてるとは言えないんだ。常に上司の命令に対してですね、自分自身が、俺もそう思う。自分もそうするべきだ。自分もそれは正しいと思ったからやったという、そういうこの意識を自分の中につくりながら仕事をしてることが、人間的な働き方であります。命令されたからやってるんだ、これじゃ奴隷だ、家畜だ。そういう意味で、命令というものでも、なぜそれをすることが大事なのか。なぜ今、それをしなきゃならん。なぜ俺が今、それをする必要があるのかということを自分でちゃんと判断して、そして、それを理解しながらやっていく。そこに人間的という働き方が生まれてくるわけであります。**

**その意味で、会社というのは、基本的には社長の夢を共有する。社長の夢をわが夢として生きるという生き方をしていかなければなりません。夢の共有というのが会社という企業体での、非常に大事な基本精神です。夢を共有できなかったら、社員としては働けません。社長の夢に感動し、社長の夢に奮い立って、俺もその夢を実現する一員になりたい。そこで、その会社に勤める価値があるわけです。そういう意味では、やっぱり社員の方々は、社長の夢を理解しようとする、社長の夢を自分の夢として生きるという、そういう人生を考えなければなりません。そうすれば、必ず会社の発展とともに自分は成長し、自分の生活も上がっていくわけであります。そのためには、社長さんは、全社員に自分の夢を、情熱を持って語り続けるというマネジメントをする必要がある。今、自分たちのやっている仕事の本当の素晴らしさ、今、自分たちのやっている本当のその仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさを情熱を持って語る。それがマネジメントだ。経営者がしなければならない仕事だ。また自分のその会社に懸けた、その仕事に懸けた夢を、情熱を持って社員に語って、そして、その自分の夢を全社員に共有してもらう。そのための努力をすることがマネジメントであります。それで、社員の方はその社長の夢を共有して、俺もその夢の一端を担って、共に喜びのある人生を歩みたい。それが夢の共有という素晴らしい生き方です。**

**人間には理想というものがなかったら、人間的な生き方は生まれてきません。理想のない人間は、自分のない人間だ。理想のない人間は、自分の人生を生きられない。理想があってこそ、人間は自分の夢を、自分の人生を生きることができる。だけど、理想というものを頭で考えてつくってしまうと、人間の人生は苦しくなるんです。理想というものは欲求と結び付かないと価値が出てきません。なぜならば、欲求が湧いてこないと、人間は行動しないからです。欲求と結び付かない理想は、絵に描いた餅です。頭で考えた理想は、人間を苦しめます。計画なんかでも、頭で考えた計画をつくってしまうとその計画を実践しようと思った途端に、われわれはその計画に縛られて、堅苦しい窮屈な、つらい苦しい人生を生きなければならない。だけど、その理想や計画が自分の欲求と結び付いたとき、したいからやるんだ、そういう欲求と結び付いたとき、初めて人生は生きがいと喜びとそして自由と開放感がつくり出されてくる。欲求と結び付かないと、あらゆるものは人間的価値を持たない。理想といえども、欲求として持たなければならない。頭で考えた理想は、自分を苦しめる。自分を抑圧する、支配する構造になってくる。だから、感性論哲学では理想というものを欲求として持つためにどうするかといったら、自分が自分に対して、どんな人間になりたいのか。どんな仕事がしたいのか。どういう生活がしたいのかということを自分に問うて、俺はこんな男になりたい。私はこんな女になりたい。俺はこんな仕事がしてみたい。俺は将来、こんな生活がしたいんだという欲求を命から呼び覚ませば、それを実現することが、まさに自分の人生を生きることだ言えるわけですよね。**

**だけども、会社はみんなだいたいこの数字目標でね、数字でこの目標を与えるもんですから、みんな数字に支配されて苦しむわけです。だけども、大事なことはその数字と自分の欲求、自分の欲望、数字と自分のこの人生の目標を数字と結び付けるという作業をしないと、会社が与える数字が、自分のその喜びのある目標というふうになっていきません。その会社が自分に与えてくれる数値目標を実現することがですね、自分のこの夢を実現することと結び付くんだという構造になってくると、やる気になってしまうんですけど、だけども、会社が与える数値目標と自分の夢は違うとなってくれば、やる気は出てきません。だから、自分の中では常に会社の目標、会社の数字目標を自分の欲求と結び付けていくという作業を自分の中でする必要があるし、また、経営幹部の方々は、全社員と個人面談をしながら、その個人が持っておる欲求や夢や関心というものとですね、会社が与えようとする、その数字の目標とを結び付けてあげるというマネジメントをしていかないと、やる気を引き出す、モチベーションを与えるということはできません。**

**だから、幹部の方々は常にそういう意味では、数字だけを与えて、やれやれと命令するんじゃなくて、常にその数字が、その人も持っておる欲望とどう結び付くか。そういうマネジメントをしてあげて、やる気にさせていくというモチベーションというものをつくっていかなければなりません。より以上を求めて生きるという生き方にとって一番大事なのは、理想を持って生きる。だけど、理想は欲求と結び付かないと価値がない。欲求は行動力だ。命から湧いてくるものがなくなってしまったら、行動をやめてしまう。だから、理想は実現できない。まずは、理想を持って生きるということが非常に大事なこの人間的な生き方の基本です。動植物には理想はありません。与えられた現実に適応するだけです。だけど、人間は、与えられた現実をよりよい方向性に変えていくという活動をするところに人間的な活動がある。それが、歴史をつくるという結果をもたらすわけです。もう少しこのより以上を目指して生きるということについて説明しなきゃならんですが、一応、１時間半たちましたので、ここで休憩を入れて、そして、そのあとまた続きの話をします。どうもありがとうございました。**

**司会：それでは、ただいまより10分間の休憩に入ります。後ろの時計で６時43分。**

**（休憩）**

**芳村：それでは、先ほどの続きですけど、とにかく第２番目のですね、この人間が持たなければならない人間の格、人間性として、より以上を求めて生きる。このどこまでもより高度なもの、より厳密なるものを追求していきたい。そういうこの高度で厳密なものを追求していく醍醐味とか喜びというものを感じるというふうな気持ちが非常に大事な人間性です。どこまでもより真実なるものを追求したい。どこまでもより善なるもの、より美しいものを追求したい。これが高貴なる精神といって非常に人間として大事な心の成長のさせ方なんです。より高度な、より厳密な仕事の仕方、そういうこの高度で厳密なものを求めていくことの喜びとか、醍醐味とかを感じるような意識が、この非常に人間性として大事であります。それを簡単な言葉で言ったら、より以上を求めて生きるという、そういう価値への情熱というふうに言うことができるわけです。**

**で、先ほど、不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さというところで、長所、短所のお話だけして、ちょっともう１つ、忘れてしまったのがあって、理性という能力の使い方という、そういうこのところで、謙虚さをつくっていく原理がもう１つあるんですが、それをちょっと言い忘れましたので、ちょっと補足してお話をさせてもらいたいと思うんですけど、理性というのは真理は１つと考える。そういうところから、完璧性を期するという能力です。もちろん、そういう意味では、完璧性を期するということは大事なことなんですけども、だけど、やっぱり、この現実的には人間は不完全ですので、なかなか完全にはいきません。そういう意味で、理性的に完璧を期するという、そういう意識を持つと、非常にストレスが多くなりますし、また、自分自身の能力についても非常に劣等感というか、まだ駄目という、そういうふうな意識が生まれてきたりなんかして、非常に自分の成長を阻害するような要因になってくる場合もあります。**

**人間自身が不完全という、そういう意識を持って、謙虚な生き方をしていって、よい人間関係というものを、社内でも、あるいは、対お客さんとの関係でもつくっていこうと思ったら、もっともっと理性的に謙虚になるということは非常に大事であって、よく専門家というのは、お客さんに命令したり、お客さんを説得したりなんかして、お客さんが言ったことをそうではありませんと言ってですね、こうですと言ってこう、なんか高飛車にお客さんを説得してしまうというのは非常に嫌な感じを与えることが多いんですよね。私なんかも、いろんな職業の人と関係を持つわけなんですけども、非常にそういうこの人間関係上、理性の使い方によって嫌な感じを与えてしまう。理性の使い方によって非常に傲慢な感じを与えてしまう、自分の自信がかえって人間関係を破綻させるという、そういう状態になってる場合が多いです。これは社内のその人間関係でもそうですし、対お客さんとの関係でもそういうことがあります。自信は大事なんですけども、だけども、もう少し人間的な、血の通った、温かみのある心を持った理性の使い方ということをしていかないと、人生、大きなつまずきになる可能性があります。**

**これまで人類は理性に対する絶対的な信頼というものを持ってやってきました。いわゆる理性に対する盲信と言ってもいいほどの、理性に対する信頼というものをわれわれは持っております。現在でも、やっぱり学者といわれる方々はほとんどこの理性しか信じられない、理性で矛盾なく考えたことは、絶対正しいんだと思って発表するわけですけど、だけど、学問は進歩する。昨日まで真理だといわれておったものが、今日はうそになってしまうというのが学問の世界の日常茶飯事ですので、学問の進歩が理性の不完全性を証明してるんだというふうに言わなければなりません。だけども、まだまだ学校教育というのは理性を磨く、理性を成長させるというところに重点を置いてるもんですから、理性を信じて生きるという、理性的に物事を主張するような人格の人が非常に多いです。理性の奴隷となって理性であらゆることを割り切ってしまうというか、理屈が通れば、感情や心の問題はどうでもええんだというような、そういうことで、理屈であらゆることをやってしまおうというふうな方も中には多々いらっしゃいます。**

**それが、嫌な感じを与えて仕事がうまくいかなくなったり、あるいは、社内での人間関係がぎくしゃくしてきたりという、そういうことの原因になっている場合が非常に多いんです。もっともっとわれわれは、血の通った温かな心を持った理性の使い方というものを覚えていかなければならないと思います。そこで、謙虚さというものを理性という観点からつくっていこうと思ったら、どういうことを考えなきゃならんかということなんですけど、この理性というのは確かに、合理的に考えることができる素晴らしい能力です。これまではそういうふうに理性を理解してきました。理性は合理的に物事を考えることができる素晴らしい能力だと言ってきたんですけど、だけども、それだけでは理性的な傲慢さというものをつくってしまうことになってしまいます。それで、感性論哲学では、どういうふうに理性というものを定義してるかと申しますと、理性という能力は、合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力だというのがで、感性論哲学の理性に対する解釈であり、意識です。理性は合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力である。合理的に考えることができるというのは、理性に対するプラスの評価なんですけども、だけども、それだけでは、この理性的な傲慢さに陥ってしまって理性故に人間は自分を不幸にします。**

**理性は合理的に考えることができる素晴らしい能力だということを原理にしてしまうことによってですね、真理は一つと考えるが故に、その宗教の違いで戦争になったり、あるいは、ちょっとした考え方の違いで離婚が生じてきたり、あるいは、自分の言うことを部下が聞かんからといって虐待というかいじめになってしまったり、あるいは幼児虐待でも、やっぱり親の言うことを子どもが聞かんから、むかつくといって、虐待になってしまうという、すべてそれは傲慢な理性故の出来事であります。理性という能力というものをどういうふうに評価し、どういうふうに使いこなしていくかということを、もっともっと高度に考えていかなければなりません。そこで、理性という能力は、確かに合理的に考えることができる素晴らしい能力なんだけど、だけど、理性は合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力なんだという理解が必要であります。理性でどんなに正しいと思っても、それは決して完全ではない、絶対ではない。不完全だ。そういうふうな意識を持って、われわれは理性を使うという力を人間として持つべきであります。**

**じゃあ、なぜ理性は不完全と言えるのか。それは人間はイコール理性ではないからであります。人間がイコール理性であり、人間の本質が理性であったならば理性はまさに万能であって、理性さえあったならば、人間の問題はすべて処理できます。だけども、人間の本質は理性じゃない。心なんだ。だから、多くの方々が、理屈じゃない、心が欲しいと叫んでおる。理屈はたくさんだというのが多くの方々のこの思いであります。本当は心が欲しいんだ。心こそ人間の本質なんだ。そういう自覚が今、多くの方々に芽生えてきておる。だけども、理屈はどうだっていいというもんじゃなくって、やっぱり人間も理性を持ってますから、理性を成長させること、理性を磨くことも大事なことです。だけども、理性だけではですね、人間の問題を処理することはできません。なぜかといったら、確かに人間は理性を持ってますけど、感性もあり、肉体もある。人間は理性と感性と肉体という３つの要素が絡み合った、そういう有機的な命が人間であります。だから、理性だけでは人間の問題を処理し尽くし得ない限界がある。理性だけで人間の問題を処理しようと思ったら、そこにはこの大きなゆがみが出てくる。**

**このことはいろんな例がありますけど、哲学の世界でお話をすると、まさに理性を人間の本質と考えて、理屈が通れば、感情の問題や心の問題は自然に解決されるんだというふうに考えておった、あの有名なソクラテスという哲学者が、どういう人生をたどったかということを考えてみてもらいたい。ソクラテスは、西洋の哲学の歴史においては、哲学の祖といわれて、ソクラテスこそ今日の哲学の出発点となった大哲学者なんだといわれてるんですけども、だけども、そのソクラテスが、理屈さえ通れば、あらゆることは解決するという、そういうことで、人間の感情や心を無視した活動をしたんですね。その結果として、ソクラテスはいろんな人から非難されてですね、そして、そのソクラテスが悪いやつだという訴状が裁判所にいっぱいたまってきて、結果として、このアテネでソクラテス裁判が開かれて、民衆のこの評決でソクラテスは死刑に値するということで、死刑を言い渡されて、牢獄につながれて、そして、結果としては、牢獄の中で自ら毒杯を仰いで死んでしまうという結末を持ったのが、ソクラテスという哲学者の人生であります。そういうことを考えると、いかに理屈だけで物事を押し通そうとするね、理性に頼った生き方がいかに人間関係に大きな恨みや、この問題をつくり出すかということをわれわれは考えてみなければなりません。**

**そういう意味においては、決してソクラテスは人間として立派な大哲学者とは言えない。確かに理性というものを原理にした哲学のこの大本であることは間違いないんですけども、だけど、人間としては非常に浅はかな偏った考え方を持っておった。東洋の哲学から言えば、そういうふうに理解することができるわけであります。その意味においてもですね、いかに理性を原理にした生き方が心を本質とする人間社会においては、かえって大きな災いの元になるかということを考えてみる必要があります。理屈が通れば、あらゆることは解決するんじゃないんだということですね。人間が本当に求めておるものは心だ。温かな血の通った心だ。そのことをわれわれは忘れてはなりません。そういう意味で、人間というのは、理性もあるけど、感性もあり、肉体もある。だから、理性だけで物事を解決しようと思ったら、感性や肉体という、心とか、あるいは体験というものが持っておるですね、価値のあり方が無視されてしまう。理屈はわかるけど、なんか納得できんと。おまえには付いていけないといって、自分から部下が離れてしまうという結果が出てくる場合が多いです。これは理屈だけで物事をしていくとなった場合に、人間関係が壊れてしまうという例であります。**

**そういうことから確かに理性も大事な能力なんですけども、理性という能力は、人間が持っている能力の一つに過ぎない。人間は理性の奴隷になってはならない。だけど、近代は、理性は完璧な能力、理性は人間に神から与えられた能力だと。人間は不完全だから、人間は神から人間に与えられた完全能力である理性に従わなければならないという判断、いかに理性が人間の外にあって、人間が理性に支配されるという構造が肯定されておったというか、理性が人間の外にあって、人間を支配するものとして理性が意識されておりました。だけども、よく考えてみれば、理性という能力は、人間の持っておる肉体の中の脳という肉体に限定された能力が理性である。理性という能力は、人間の持っておる命の中の、肉体の中の脳という肉体に限定された能力が理性だ。だから、理性という能力は、人間の持っておる能力の一部に過ぎない。一つに過ぎない。だから、人間は理性に支配されてしまってはならないのであって、人間が理性を支配して、人間が理性を使いこなして、人間のために理性をどう使うかということを考えていかなきゃならんのであって、決して、われわれは理性の判断に従って動いてはならないんだ。そういうことを考えていく必要があります。**

**これはどういうことなのかといったら、理性的に考えて正しいことをするのではなくって、人間的に考えて正しいことをするという理性の使い方が大事なんだということですね。理性的に考えて正しいことをしようとすれば、考え方が違ったら対立をします。そして、お客さんが自分と違うような意見を持っておったら、自分の考えによって、お客さんの考えを説得して、そして、お客さんの間違いを指摘して、自分の考えをお客さんに認めさせようとするような、そういう傲慢な、支配的な関係性が生まれてきます。これは会社においてもそういうことで、部下が自分と違う考え方を持っておった場合には、上司は自分の考え方を部下に押し付けて自分の思うように部下を動かそうとする。そういうふうな理性的な扱いになってしまいます。これがこの人間関係に、冷たい、冷ややかな、あるいは反感とか、恨みとかというようなものさえつくってしまう原因になってしまうんですね。その意味で、われわれは、理性的に正しいことをしようとするんじゃなくて、人間的に正しいことをしようとしなければならない。**

**人間的に正しいとはどういうことなのかといったら、考え方が違ったら、考え方の違う人がおったらまず相手の考えに耳を傾けて、そして、相手の言ってることの中から、何かしら自分が学び取るものを見つけ出して、そして、あなたと出会えてよかったと。あなたからこれを学んで、自分の考えはこういうふうに成長しましたと言って、考え方の違う人に感謝をして、そして、その自分を成長させていこうとする努力をする。また、自分の考えも相手に言って、また相手にも自分の考えから何かを学んでもらう。自分の考えを押し付けるんじゃなくって、まず相手から自分が学んで、そして、また自分の考えも相手に取り入れてもらうような努力をする。そういうところに、血の通った温かな心を持った、理性の使い方というのがあるわけですね。すなわち、考え方の違う人とどうしたら一緒に仲よくやっていくことができるだろうか。感じ方や考え方や価値観が違う場合に、どうしたらその人と仲よく仕事をし、仲良く付き合い、生きていくことができるだろうか。そのことを考えるために理性を使って、こうしてみたらどうだろう、ああしてみたらどうだろう、こうしてみようか、ああしてみようかというふうに考えていく。そこに血の通った温かな心を持った理性の使い方があるわけです。**

**だけど、理性を原理にして生きると、考え方が違ったら、対立をして、そして、その自分が正しいと思う場合には、相手を説得して、自分の考えで相手を支配するという、言って聞かせるという、そういうふうな扱い方をしてしまう場合がある。これは特に職業人で、プロとしての自信を持った人間が往々にして自分の考えが正しいんだと思ってしまって、そして、そのお客さんの考えを否定して、そして、自分の考えを認めさせようとするような仕事の仕方をする人が案外多いです。そういうことになったときに、何かしら嫌なやつやなとお客さんが感じて、それで、この契約が破綻になってしまったりするような場合もありますよね。もちろん、自信は大事なんですけども、正しいか、間違ってるかということだけで、理性だけでこの人間関係を処理しようとするところに、大きな問題が出てくるということをわれわれは忘れてはなりません。理性的に正しいことをするんじゃなくて、人間的に正しいことをする意識でわれわれは理性を使うということを考える必要があります。**

**考え方の違う人とどうしたら一緒に仲良くやっていくことができるだろうかということを考えるために理性を使うというのが、人間的に正しい理性の使い方なんですね。理性の使い方というのは、考え方が違ったら、自分が正しいと思う考え方で相手を説得する。これが理性的に正しいやり方です。いわゆる不正を認めないという、間違ったことは許さないというのが理性です。だけど、現実社会というのは、いろんな人がいて、いろんな価値観の人がいて、そして、そのどんな考え方もみんなそれぞれ主観的で個性がある。それがこれから、われわれが生きていかなければならない個性の時代という、そういう時代のあり方であります。そして、どんなに正しい考え方でも、この長い歴史を考えればね、いずれはそれはうそになってしまうというね、まあ、そういう間違った考え方になってしまうというのは歴史の実証であります。それは学問の進歩で証明されておる。真理だといわれておったものが明日にはうそになってしまう。それが、学問というものの実態であります。**

**だから、どんな正しい考え方でも絶対ではない。これを東洋の悟りの世界では、諸行無常、諸法無我といって、あらゆるものは変化する、何一つ、変化しないものはないんだという言葉で表現しておるわけですけど、だけど、西洋人、欧米人はこの真理を探究するということが人間にとって一番大事なことだと考えて、恒常不変の真理を探究する。永遠に変わらないものが大事なんだという価値観で欧米人はこれまでやってきましたし、またわれわれが今、学んでる学問も、恒常不変の真理を探究するということをしております。それをするために理性を使いますので、恒常不変の真理というのは絶対的な変わらないものですから、だから、不完全な人間は、それに支配されるという構造になってしまって、結果として理性が人間を支配するという、そういう意識がつくられてしまったんです。**

**だけども、われわれは、そういう西洋人の考え方を乗り越えていって、本当にいろんな民族や、いろんな宗教を持ってる人たちが仲良く生きていく世界をこれからつくっていかなければなりません。真理は一つではないんだ。恒常不変の真理なんてないんだ。いろんな考え方があって、どういうふうにお互いに宗教が違いながらも、仲よく生きていけるのかということを考えるために理性を使うという、そういうこの理性の使い方を覚えていかないと、世界の平和なんていうものは実現できるはずはありません。そういう意味においても、われわれは欧米人を超えて、より素晴らしい理性の使い方をつくり出して、それを欧米人に教えていって、そして、このイスラエルとパレスチナのあの不毛な戦争を終わらせなければならない。そして、宗教戦争を終わらせなければならない。民族戦争を終わらせなければならない。それはアジア人の仕事だ。アジア人が新しい理性の使い方を欧米人に教えてあげて、そして、彼らをもっと今よりも幸せな、人間的な生き方ができる、そういうこの人間に欧米人を成長させてあげなければならない。そのためには、この人間的な理性の使い方というものをわれわれ自身がちゃんと覚えて、それを欧米人に教えていくということをする必要があります。**

**そういう言い方をすると、なんか傲慢な言い方に聞こえるかもしれませんが、それは歴史の流れです。アジア人は、あらゆるものは変化するんだという考え方の中で生きておりますけど、西洋人は、この恒常不変の真理を探究する、そういう価値観の中で生きておるんですから、それが故に戦争が生じるんです。だから、この個性の時代という、いろんな人たちが、いろんな考え方や宗教を持っておって、しかも、それでお互いを認め合って生きていくという、個性の時代をこれからつくっていかなきゃならんのですから、そこにおいては、考え方が違っても、どうしたら一緒にやっていけるんだろうという理性の使い方をしていかないとね、これからの時代、これからの組織は成り立ちません。そういう理性の使い方によって、温かな血の通った心が生まれてくるんです。それが愛なんですよ。考え方が違う人と、どうしたら一緒に仲良くやっていけるんだろうと考えることが愛なんですよ。考え方の違う人とは一緒にやっていけないというのは理性なんですよ。そういう意味で、この謙虚な理性の使い方というものを、われわれは自分のものにしていく必要があります。**

**理性というのは、合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力だ。自分がどんなに正しいと思っても、それは決して完全ではない。絶対ではないんだというのは、これは理性に対するマイナスの評価なんですよね。だけど、理性に対するプラスの評価とはなんなのかといったら、理性は本当のことも言えるけども、うそも言える。このうそも言えるというところに、理性という能力の積極的な価値があります。うそを言うということは、なんとなく言葉としては悪いことというふうにこう聞こえますけど、だけど、うそを言うことができるという力は、理性が持っておる積極的な力、能力なんです。どういうことなのかといったら、本当のことを言うということは、事実に合ったことを言うことなんですよね。うそを言うということは、事実ではないことを言うことです。ところが、事実というのは、現在と過去しかありません。だけど、理性は50％事実ではないことが言える。うそを言うことができるという能力を持っておるがために、まだ事実になっていない未来に対応できるという、そういうこの力を理性は持ってるんです。**

**理性はうそを言うことができるという、この事実に支配されない、事実に拘束されない、事実に縛られていないという、そういう面を50％持っていることによって、理性は未来に対応できる能力です。未来とはなんなのか。未来とは、夢であり、希望であり、理想であり、理念である。希望とか、夢とか、理想とか、理念とかというのは、これはいったいなんなのかといったら、それは絶対こうだということじゃなくって、今よりもよりよいこと。それが夢であり、希望であり、理想であります。だから、理性という能力は、よりよいことを考えることができる能力なんです。うそが言えるという、事実に拘束されていない、事実ではないことが言えるという力を持ってるが故に、理性は未来に対応して、より素晴らしいこのものをつくっていくことができるという力を持っておるわけです。だけど、動植物は、そういう理性を持ってませんから、より素晴らしいものを自らつくっていくという力はありません。動植物は、与えられた現実にどう適応するか。どう対応するかという、本能的な生き方しかできません。だけど、人間だけが、この理性という能力を持つことによって、より素晴らしい未来を考えることができる。そのことによって、人間だけが自ら歴史をつくるという活動をすることができるわけであります。**

**ここに人間的な理性の持っておる素晴らしい面があるわけであります。その意味で、理性という能力は、絶対こうだというようなことは、絶対、言ったらいかん能力なんですけども、だけど、理性はよりよいことを考えることができるところに、理性の積極的な価値があるんだ。だから、われわれはよりよいことを考えなければならないと。だけども、この大事なことは、他人の考えをよりよい考え方に成長させてあげましょうというのは、これはお節介なことで、大事なことは、自分の考えをよりよい考え方に成長させるために理性を使うということが、理性の使い方の基本であります。他人の考えをよりよい考え方に成長させてあげようとすると、結局は、それは自分の考えと同じ考えに相手をしてしまおうという、画一化ということになってしまいやすいんですよね。相手を成長させてあげるということは、相手は自分より劣ってると思うから相手を成長させてあげようということになってしまうので、結果としては、自分と同じ水準にまで相手を成長させる。自分と同じ考えの人間をつくる。そういうことになってしまいやすいんです。だから、人を成長させてあげようというのは、これは一種、傲慢な意識であって、人間は自分自身の考えを他人から何かを学ぶことによって、自分自身の考えを成長させる。そういうところにより以上を目指して生きるというね、そういう生き方が生まれてきますので、他人から学んで自分を成長させる。そのことのために理性を使うという、そういう理性の使い方を覚えていかなきゃなりません。**

**他人の言ったことにむかつくんじゃなくって、自分と違う考えに出会ったら、何かを学ばしてもらう。そして、学んで、自分を成長させて、君と出会えたので、僕はこういうふうに考え方を成長させることができました。ありがとうと言って、自分と違う考え方の人に感謝をする。これが個性の時代を生きる生き方であり、宗教が違っても仲よく生きるということをするための生き方なんですね。相手から学んで自分を成長させる。お互いがそれをする力を持ったとき、地球は平和になります。謙虚な理性の使い方、人間的に理性を使う。まあ、そういう理性の使い方をちゃんと仕事の中でも、家庭の中でもできるような自分にこれから成長していくということをやっていかないといけません。不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さという、命から謙虚さがにじみ出てくるという、そういう構造に、このなっていくためには、この人間には長所、短所、半分ずつあるということと、それから、この謙虚な理性を身に付けることによって、ひとりでに謙虚さがにじみ出てくるという、そういう人間性ができあがるということなんですね。ちょっとこれは補足で申し上げました。**

**話の流れとしては、第２番目の、より以上を求めて生きるという、この人間にしかできない生き方をしていく。このより以上を求めて生きるというのは、神にも動物にもできない、人間にしかできない生き方なんだから、人間が人間として本物の人間であろうとするならば、この生き方をせずして、どうして本物と言えるのかということになってきます。そこで、このより以上を求めて生きるという生き方をするためには何が大事なのかといったら、まずは理想が大事だと。理想がなかったら、より以上を求めて生きるという生き方をすることはできない。だけど、理想は頭で考えたら、頭で考えた理想は命を苦しめる。理想は欲求として持たなければならない。欲求として持った理想は命に喜びを与える。全然人生が違ってくる。つらい人生を生ききるか、命が燃える喜びのある人生を生きるか。同じ理想でもですね、理性で考えた理想と、欲求として命から湧いてくる理想とには、それほどの大きな違いがあります。命から湧いてくるものがなかったら、燃えないんだ。命は燃えないんだ。燃えられないんだ。理性では冷たくなってしまう。本当に命を燃やして、喜びのある人生を生きようと思ったら、欲求は大事だ。欲求と結び付かなければ何事にも燃えられない。欲求と結び付かなければ行動力は出てこない。理想は実現できないんだ。その意味で、理想といえども、欲求と結び付くことが大事である。どういうふうにこの理性で考えた理想と欲求を結び付けるか。あるいは、どういうふうにして欲求としての理想を命から引き出すか。そのことを、人生においては考えていかなければなりません。**

**まあ、そのためにもわれわれは、今、自分のやっておる仕事の意味や、価値や、値打ちや、素晴らしさというものを理性で考えて、そして、自分の命から、今、自分のやってる仕事に対する興味や関心を呼び覚ます。まあ、そういう努力を自分自身でもする必要があります。意味を感じれば、やる気になります。価値や素晴らしさを感じたら、命は確かに燃えてきます。そのために、われわれは理性を使って理性で意味や価値を考える。理性で今、自分のやっている仕事の意味や価値を考えると、そうすると、理性で考えた意味を感じる感性が成長していきます。意味というのは、基本的には感じるもんなんですよ。価値も感じるもんなんですよ。だけど、意味や価値を感じる感性を成長させようと思ったら、理性を手段能力に使って、今、自分がそのものに感じている、今、自分がその今の仕事に感じてる意味よりも、もっと高度な、もっと深い意味を理性で考える。そうすると、その意味や価値を感じる感性が成長して、今よりももっと燃える。今よりももっと打ち込めるというね、そういう自分ができてくるわけであります。仕事の意味と、価値と、値打ちと、素晴らしさというものを感じないと、この命は燃えません。欲求がなかったら、行動はできません。理性だけでは、嫌々ながら動くというつらい、苦しい生き方になってしまいます。その意味で、この理想というものを欲求と結び付ける。欲求と結び付けなければ、その仕事もやる気にならないというね、まあ、そういうこのことをちゃんとわかって、そのための努力をぜひやってもらいたいと思います。**

**で、２つ目に大事なことは、より以上を求めて生きるということをするためには、問題意識、問いがないといかん。問題がなかったら、より以上を求めて生きる、成長はできません。問題がなかったら、何もせんでもいいわけですので、問題があるから、どうしようかと考えますので、この問題というのは非常に大事ですけど、だけど、先生から与えられる問題に答えておったんでは、自分は成長しません。自分の命から湧いてくる問題に対して、どういうふうにそれを乗り越えていくか、努力をすると、人間は成長します。先生や他人から与えられた問題に対応して理性を使っているだけでは、自分は成長しないで、理性しか成長しません。学校教育は先生が問題を与えるもんですから、頭しか成長しません。人間性は成長しません。だけど、自分の命から湧いてくる問題、悩みですね、そういうものにどうしたらいいのかということで自分が考えていくと、人間性が成長します。人間が成長します。同時に理性も成長します。そういう意味で、自分の命から湧いてくる欲求、自分の命から湧いてくる問題意識を持つことが非常に大事である。仕事をしながら、問題を感じる。仕事をしながら、何かしら、この問題点をつかみ取る。そういう自分自身の命から湧いてくる問題、それが自分の能力を成長させ、また自分の人間性を成長させる。そういう働きをするわけであります。そういう意味で、問題意識を持って生きるというね、他人から教えてもらったんじゃなくて、自分の命から湧いてくるものとしての問題意識を持って生きる。これも非常に大事な人間的な生き方のですね、基本であります。**

**答えも大事なんだけど、答えよりもっと大事なのは、問いだ。問題意識のない人間は成長しない。答えを持って、答えに縛られたら、人間は成長が止まる。答えを持って、答えに縛られた人間たちが対立をつくってしまうんだ。答えを持ちながらも、なおかつ問い続ける。本当にこれでいいんだろうか。本当にこれでいいんだろうか。そう思ってる限り、人間は成長し続ける。これでいいんだと思ってしまったら、そこで成長は止まる。これでいいんだと、答えを持ってしまったら、その答えと違う答えが出てきたときに対立をする。それが組織を破壊することになってしまう。答えに縛られてはならない。答えに縛られた人間ほど恐ろしいものはない。答えに縛られた人間たちが戦争をするんだ。宗教戦争も、また社会体制の違いのイデオロギーに基づく戦争も、全部答えに縛られた人間たちが殺し合うんだ。答えに縛られた人間たちが離婚するんだ。答えに縛られた人間たちが幼児虐待をするんだ。いかに答えに縛られることが恐ろしいか。理性が出した答えに縛られたら、人間は理性の奴隷だ。人間ではなくなってしまう。殺し合うんだ。**

**だけど、答えがなかったら、現実は生きられない。答えを持ちながらも、なおかつ問い続ける。果たしてこれでいいんだろうか。それがあるから、他人から学ぶことができる。他人から学ぶから成長できる。決して自分の答えにこだわらない。常に何かしら、相手から学んで、自分を成長させる。そういう気持ちがあると、自分と違った考え方の人にも温かい気持ちで接することができますし、また相手から何かしら学ぼうという、そういうこの相手から学ぼうとすることは愛ですから、相手から学ぼうとしないことは愛がないので、相手から学ぼう、相手を知ろうとすることは相手に対する愛ですから、だから、相手とのあいだで非常にいい人間関係ができて、相手を気分よくさせることができます。相手から学ぼう、お客さんから学ぼう。お客さんから学んで成長しよう。自分の考えを押し付けるんじゃなくて、お客さんが何を望んでいるかということを勉強させてもらおう。そういう気持ちで、自分の専門家の考えをお客さんに押し付けるということをしないで、もちろん、専門家としてアドバイスはするけども、だけど、お客さんの要望も真摯に受け入れてですね、そして、そのお客さんが何を望んでおるのかを、この知ろうとする努力、その努力が愛なんです。**

**相手が自分と違う考え方を持っている場合に、どうしてそういう考え方になったのか。相手がそういう考え方をする根拠を知ろうとする。まあ、そういうこの相手を知ろうとする努力が、相手に対する愛であってですね、相手に満足感を与える。相手を知ることは、自分の人間性の幅を広げることだ。人間性の豊かさはそうしてできてくるんだ。説得して、真理は一つだと言ってですね、自分と同じ考え方の人間を増やしていくのでは、人間性は貧しくなる。人間性は狭くなる。だから、いろんな人間から学んでいくことによって、人間性の幅ができる。人間性の豊かさができてくる。それが自分が人間として成長していくということである。自分の考え方を押し付けたのでは自分は大きくならない。ちっぽけなままだ。そういう意味でも答えに縛られないで常にこの問題意識を持って、問いを持って、本当にこれでいいんだろうか、そういうふうな気持ちで成長し続けていくという、より以上を目指して生きるということをしないと、人間的な生き方をしてるとは言えません。だけど、答えがなかったら、人間ではない。やっぱり、俺はこう思うという答えを持ってないといかんし、俺ならこう判断するということはなかったらいかん。それのない人間は、自分のない人間だ。答えは必要なんだ。だけど、答えに縛られたら、人間は対立を呼び、心貧しき存在になってしまう。答えを持ちながらも、なおかつ問い続けて、そして、いろんなことを学んでいく。そういうね、柔軟な理性の使いかをしていかないといけません。**

**３番目に大事な、より以上を求めて生きるために必要なことは、人間としてもっともっと成長したいという、人間としての成長意欲です。人間としてもっともっと成長したい。人間としての成長意欲を持ってないといけないと。いったいなぜ人間は成長しなけりゃならんのか。なぜ今のままの自分ではいけないのかということも根拠としては、ちゃんと知ってないといけないので、俺は今のままの俺でええんやと言ってる人に、その成長したいという意欲を持たせるためにはどうしたらいいのかということも考えておかなければならない大事な問題です。その命というものは、ただ生きてるだけじゃなくって、進化するというプロセスをたどって、命は存在するものです。で、おぎゃあと生まれた命は、無意識的にもいろんなことができることになっていく喜びというものを持っております。できないことができるようになることは命の喜びです。これは本能的なものであってですね、今のままでいいという命はありません。実際問題、子どもは生まれてから、だんだん、だんだん、いろんなことができるようになっていって、で、そのできる喜びというものを命は感じながら、成長していくのが命の自然な姿です。命そのものが成長を望んでおるんです。**

**今のままでいいというのは、これはこのある意味で、人間的な、言ってみれば、楽がしたいとか、易きに流れる、安逸をむさぼる。そういう安定を望むような、保守的な意識であって、そういう生き方をしておるということは、もっと幸せになりたいとか、もっといい家に住みたいとかということを考えないということですから、その意味では動物的次元というふうに言わなければならない。与えられたものに適応するだけでいい。それは動物の姿です。だけど、人間は常に与えられたものをよりよい方向性に変えていくという努力をするところに、人間的という、そういう生き方が生まれてくるわけですので、その意味においては、もっといい家に住むとか、もっと幸せになるとかということを考えるとするならば、能力も成長させていかなければならないし、人間性も成長させていかないと、もっと幸せになることはありません。また、もっとたくさん金を稼ごうと思ったら、能力を成長させなければ、もっと金は稼げません。もうそういう意味で、必然的に人間はこの幸せを求める限り、何かしら、より以上を求めて努力をするということが要求されてくるわけであります。**

**命そのものは常に成長を願っておるんだ、命とはなんなのかということを、われわれは見つめることによって、知る必要があります。このままでいいという状態というのは決して命が望んでおるあり方ではない。常に命はより以上、より素晴らしいものを求めるというあり方において、命は生きておるのであって、この今の段階でいいということは、これは結果として堕落を意味するわけであってね、本当に今のままでいいという状態であったならば、時代は進んでいく、時は流れていくので、堕落することになってしまいます。だけど、本当に現状維持をするだけでも、人間は努力をしないと現状維持はできませんから。本当に怠けてしまったんでは、どんどん、どんどん、生活は貧しくなっていくだけです。その意味でも、人間はやっぱり努力をする、現状維持ということをするだけでも、現実的には努力する必要があります。常に命というものはですね、成長を願っている。より以上を求めておるというのは、命の本当の姿です。いわゆる成長するところに喜びがあるのであって、成長、変化がないところに退屈と堕落があるだけです。そこには本当の命の喜びは存在しません。**

**そういう意味においても、われわれは人間としてもっともっと成長したいという、人間としての成長意欲というものを持っておるということが、人間としての本物のあり方であって、成長意欲のない人間は、人間として偽物。あるいは、必然的にそういう人は奴隷となってしまって、世の中の動きに流されてしまって、自分で目標を持って生きるということはやってませんから、結局は、自分の人生は生きられない。自分のない人間ということになってしまいます。目標を持って生きていくことによって、初めて自分の人生を生きてるのであって、目標がなかったら、自分がないということですから、奴隷的な生き方をしてるということにもなってしまうんですよね。そういう理由からして人間は人間としてもっともっと成長したい、そういうふうな気持ちを持っておることが大事です。**

**人間として成長するということはどういうことなのかといったら、人間の成長は能力と人間性、両面において成長するわけですけど、その能力の成長というのは、潜在能力を引き出してくるということによって能力は成長します。人間にはまだ出てきていない潜在能力がたくさんあります。これは脳生理学から言うならば、われわれは生まれながらに持って出てきた潜在能力の約１割強しか使っていない。顕現させていない。まだ９割弱も人間には可能性が残されておるんだ。それを引き出してくることによって、自分が成長できる。では、人間性というのはいったいどういうものなのか。人間性というのは、これは今お話をしてるところが人間性なんですけども、人間としてもっともっと成長したいということは、人格の成長ということになってくる。人格を成長させようと思ったら、人格には高さ、深さ、大きさという３つの次元がある。人格の高さを求め、人格の深さを求め、人格の大きさを求めていく。まあ、そういうこの意識を持ってですね、いろんなことをすることが、この人格の成長、人間として、人間性においてもっともっと成長したいということを具体的に実現する道筋、方向性なんですね。**

**人格というのは、高さ、深さ、大きさ、３つの方向性に成長するんだ。もっと深い人間になりたい。もっと大きな人間になりたい。もっと高貴なる精神を持った人間になりたい。そういう気持ちがこの人間というものを人間性において成長させるというね努力の仕方になってきます。そういう成長することの喜び、醍醐味というものをもっともっと感じるという生き方をする必要があるので、教育というのは、できないことができるようになった喜びを感じさせるというのが教育の非常に大事な、この方法論なんですよ。できた、わかったというね、喜びを感じさせてあげたら、どんな人でも、どんどん、どんどん、伸びるんですよ。だから、できなかった、駄目、できなかった、わからなかった、駄目だったという、こういうことを感じさせれば、だんだん勉強しなくなりますよ。**

**また、そういうことで、この人間性においても、能力においてもね、わかった、できた、やったという、そういうこの感動を、どういうふうに自分がこうつかみ取るかで、成長意欲というのは喜びとして出てくるんですけど、残念ながら、現代の学校は多くの人に挫折感を味わわせてしまってるような、学ぶ喜びを知るよりは、学ぶ苦しみを知るという現場になってしまっています。だけど、実際問題、仕事をするようになってから、自分がだんだん仕事ができるようになっていく喜びというものを感じ取るというふうな人も多い。学校では頭だけですけど、現実的には肉体を使ってね、心を使っていろんなことをやりますので、そういうところから、この学校で体験できなかった、新たな喜びを仕事を通して、獲得して、仕事をすることによって、ぐんぐん伸び始めるという方もいらっしゃいます。なんらかの点で、できないことができるようになっていく。わからないことがわかった、そういう喜びをもっともっとわれわれは求めていく必要がある。これが人間としてもっともっと成長したいという、この欲求の具体的な姿です。**

**より以上を求めて生きるということの内容としては、欲求として理想を持つこと。それから、問題、命から湧いてくる問題意識を持つこと。そして、人間としてもっともっと成長したいという成長意欲を持つこと。この３つがより以上を求めて生きるという、そういう生き方の具体的なこの内容になってきます。そういうものを持っておったら、人間として本物と言えるし、そういうものを持ってなかったら、人間としては偽物ということになってしまう。実は、母なる宇宙は、そういう本物としての生き方を人間に臨んでおるんだ。母なる宇宙は、お母さんは、理想を持って生きることを子どもに望んでおるんだ。問題意識を持って生きることを望んでおるんだ。人間としてもっともっと成長したいという意欲を持って生きてくれることを母は子どもに望んでおるんだ。そのために、さまざまな能力、可能性というものを母は人間に与えたんだ。そういうふうに、この宇宙と人間との関係性から理解することができるわけであります。そういう意味で、より以上を求めて生きるということは、母なる宇宙の期待に応えて生きる。宇宙の摂理に従って生きる。まあ、そういう生き方になってくるわけです。**

**じゃあ、謙虚さと成長意欲があったら人間か。ちょっとその２つでは、まだまだ本当の人間とは言えないと。もう１つある。それは、この社会性という観点からですね、出てくる課題なんですけども、このより以上を求めて生きるという、この人間にしかできない生き方をすると、そこから新しい価値の世界という領域が生まれてきます。より以上を求めて生きるという生き方は、神にも動物にもできない。人間しかできない生き方である。そういう生き方をすることによって、人間は価値の世界というものを自らつくり出すんですね。価値の世界というのは、これは上には上があり、下には下があるという、そういうふうな世界が価値の世界ですけども、これがより以上を求めて生きる努力というものを通してですね、つくられてくる、このレベルの違いというものです。どういう努力をするかによって、努力しない人は価値が低くなるし、努力をする人は価値が上がっていくというかたちでの、この違いが生まれてきます。そこにこの価値の世界という、新しい世界が生まれてくる。**

**価値の世界というのは、より以上を求めて生きるという生き方をすることによって生まれてくる世界ですから、人間しかない世界だ。神は完全かつ絶対という世界に固定されてしまっておる。動植物は、不完全かつ有限という世界に固定されてしまっておる。人間は不完全でありながら、完全なるものを求めて生きるという生き方ができる。より以上のものを求めて生きるということができるのは人間だけだ。この人間にしかできない生き方をすることによって、価値の世界が生まれてくる。だから、価値の世界は、人間のみ固有の存在領域であるという言い方ができるわけで、人間は価値の世界に住んでおるのである。人間は自然の中に住んでおるんじゃない。人間は価値の世界という、価値をつくり出しながら、その自らつくった価値の中で生きるという、そういう生き方をするのである。価値の世界とはなんなのか。それが文明であり、文化であり、歴史だ。人間はより以上を求めて生きるという生き方によって歴史をつくる。歴史をつくるとは、文明をつくることであり、文化をつくることである。そういうふうにして、人間は自らつくった歴史と文明と文化の中で生きる。それが人間というこの命の現実的なあり方であります。そして、この歴史と文明と文化、それを現時点で捉えれば、社会と言うことができる。そこで人間はですね、社会的存在として、どういうふうなですね、あり方をしなきゃならんか。そういうことが出てくるわけであります。**

**社会というのは、いろんなものがお互いに有機的に絡み合いながら、影響を与え合っている。それが社会という空間というものの構造なんですね。この空間というのは、いろんな存在がお互いに横の関係で有機的に結び付きながら存在してるというのが、宇宙空間というものの基本的なあり方です。ところが、ものとものがお互いにこの関係し合うと、そこから意味や価値が生まれてくるという相乗効果というのが出てきます。空間というのは、ただ物質的な、そのものじゃなくって、空間そのものが意味や価値、値打ちを創造し続けておるという、そういうこの世界なんですよ。空間の中にも雰囲気というのがある。雰囲気というのは、この空間がつくり出す、この意味や、価値や、値打ちや、素晴らしさという、そういうものであって、人間なんかでも、A君とB子さんが結婚したら、A君とB子さんが結婚しなければ出てこないような、そういうこの家庭のあり方、そういうこの意味、価値がこう生まれてくるという、人間が関わる空間というものの姿であります。それを空間的価値というんですけども、この空間的価値というのは、関係性から出てくる価値。これを空間的価値という。**

**で、この人間は社会的存在であるというふうにいわれますけども、この社会的存在であるとはどういうことなのかといったら、それは自分の価値は他人が決定する。自分の価値は関係性からつくられるんだということですね。自分がどんなに素晴らしい能力を持っておっても現実社会においては、他人によって評価されなかったら、一文の価値もない人間だ。それが社会的存在としての人間のあり方であります。現実は他人に評価されてなんぼの世界。どんな素晴らしい能力を持っておっても、他人に評価されなかったら、一文の価値もない。これが社会の現実なんです。確かに自分が努力してつくっていく価値はあるんですけど、それは自己満足の世界だ。現実を生きていくためには、他人から評価されなければならない。それが社会の厳しさなんですね。人間は社会的存在として、どういう人間性を備えなければならないかという、そういう条件が第３番目に出てきます。これが、最後のこの人間性の条件、人間が基本的に持たなければならない人間の格になるわけですね。**

**じゃあ、第３番目の人間の格とはなんなのか。それは人の役に立つこと。人の役に立つことを喜びとする感性。人の役に立つことがうれしいという気持ち。これが人間のですね、非常に大事なこの格を意味する条件です。人の役に立つことがうれしいというのは愛なんですね。愛がなかったら、人間ではない。人の役に立つ人間になりたい。人に必要とされる人間になりたい。人の役に立つことがうれしい。そういうこの気持ちがあって、初めて仕事は、商売は成功します。自分の利益を追求するだけでは、商売はできません。人の役立つことをして、初めて金がもらえるという構造が、この商いであり、また会社、職業というもののあり方ですので、まずは人の役に立とうとするような、そういう意識を持って、人に喜んでもらう結果を出さないと、金は入ってきません。建築でも偽装問題があって、その人に喜んで、客に喜んでもらえないようなことをやったのでは、修理をせないかん、また壊して建て直さないかんということになってしまったら、本当に会社はあがったりになってしまう。やっぱり基本的に、その人に喜んでもらえるという結果を出すことが、実業においては、仕事をするということの究極の価値であります。**

**他人から評価されなかったら一文の価値もない人間だ。そういう厳しさをわれわれはわきまえた生き方をしなければならない。自分の価値は他人が決定する。だから、基本的には人の役に立つことを喜びとする感性、そういうものを持って初めて、人間は社会的存在として生きていけるということになってくるわけです。どうしたら人に喜んでもらえるか。そのことを体験できる場が職業であります。職業というのは、人のために何かをして金をもらうという世界ですので、本当に自分自身が人の役に立つ人間なのかどうか。本当に自分が人に喜んでもらえるような、生き方、仕事ができてるのかどうか。それが実証される場が職業という現場であります。そういう意味で、職業というこのものを通してですね、われわれはどういうふうな生き方というものを学んでいく必要があるのかといったら、あらゆる職業というものは、その仕事に従事する人間を人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間に育てあげる。そういう力を持ってるのが、職業というものが持っておる人間に対する価値なんです。職業とは、その仕事に従事する人間を人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間に育てあげる。その力を持ってるのが職業といわれるものです。**

**ホリエモンがやったみたいなああいうのは職業というんじゃ、あれは虚業というんです。虚業というのは、人の役に立つよりは、自分の利益を優先させてその資本の論理に基づいて、金を増やしていくことだけを目的にした働き方をする。あれは職業としての実態がない、虚業なんですね。金だけを増やす。本当の職業というのは、人の役に立とうとして、人の役に立つことを喜びとするという、そこに実業としての職業の価値があります。ただ資本の論理で、資本を増やしていくことだけを目的にした経営とか、働き方をすれば、それは自己中心的な生き方であって、虚業というふうにいわれます。職業というのは、人の役に立ってなんぼの世界。人に喜んでもらってなんぼの世界。それが職業というものが持っておる具体的な価値です。そういう意味で、職業というのは、どんな職業でも、その仕事に従事する人間を、人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間に育てあげる。そういう力を持ってるものを職業というふうに言うわけです。それが実業の世界です。そういうことができなければ、人間として本物ではない。人間の格があるとは言えない、社会的存在としての人間の格があるとは言えない。社会的存在としての人間の格というのは、人の役に立つことを喜びとするという愛、それがこの社会的存在としての人間の格というふうに言うことができるものです。**

**この人に喜んでもらうというのは、単にお客さんに喜んでもらったらいいだけじゃなくって、一緒に仕事をしてる仲間にも喜んでもらい、感謝してもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性をつくっていこうという、そういう思いが本物の印であります。単に客だけに喜んでもらったらいいというのは、これは半端な、本当のプロ根性のない人間の姿であって、職業というのは、やっぱりいろんな人と関わりながらやっていきますので、一緒に仕事をしてる仲間にも喜んでもらい、感謝してもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を磨いていく。そういう意識を持ったとき、社会的存在として本物になったとこう言えるわけです。そういうことを考えたならば、この会社内部のさまざまな人間関係から出てくる問題、悩み、苦しみ、これもやっぱり、自分を成長させるために出てきてくれた問題なんだ、課題なんだというふうに受け止めて、そして、その問題を乗り越えていく努力をすることによって、職業人としての人間性は鍛えられます。ちょっとした人間関係のトラブルがあったなら、もうやっていけないというので、そこから逃げてしまう。まあ、これはこの人間の生き方としては、社会的存在としてはですね、浅はかというか、人間として成長できない、偽物の人間の姿です。そういういろんな問題があっても、それをどうしたらですね、乗り越えていけるか。その努力をして、どんな人とでも、仲よく生きていくことができる自分をつくっていこうとする努力をする。**

**だけど、なかなか人間というのは、やっぱり生理的に合わんというような人もおりますからですね、みんなと仲良くはできません。だけども、１人でもより多くの人と、仲良く生きることができる力を持った自分をつくろうとする努力は、これは職業を通してつくっていかなければならない、大事な努力目標です。そういう人間関係の問題だけじゃなくって、この仕事上の能力の問題もあるし、またお客さんから、いろいろ言われるトラブル、クレームという問題もあります。まあ、そういうものも全部、これは自分を成長させるために、自分を本物の人間に鍛えてくれるために出てきてくれた問題なんだと受け止めていくことが、職業を通して自分を本物の人間に成長させていくという道なんですよ。そういうふうに考えながら職業というものは、自分を本物の人間に磨いていくれる力を持っておるんだ。職業とは、自分を本物の人間に磨いてくれる唯一の道場だ。そういうふうに理解しなければなりません。職業を通して実力はできるのである。生きる力というのは、実際、職業の中で磨かれていくんだということを、われわれは知りながら、そのいろんな仕事に関わっていく必要があります。**

**なんで仕事をしないと人間は本物にならないのかということなんですけど、人間が人間として本物となり、本当に人間の格というものをつくっていくために何が必要なのかといったら、人間と社会の実態に触れるということがなかったら、人間は本物にはなりません。人間と社会の実態とはなんなのかといったら、社会というのはどんなに恐ろしいのか。どんなに醜いのか。どんなに素晴らしいのか。人間というのがどんなに醜い存在なのか。人間というのは、どんなに恐ろしい存在なのか。人間というのはどんなに素晴らしい存在なのか。この人間と社会の本当の恐ろしさと、本当の素晴らしさに命が触れて、初めて人間は本物の人間に磨かれていくわけであります。じゃあ、どうすればいったい、われわれは社会と人間の本当の恐ろしさと、本当の素晴らしさに命が触れるという体験を持つことができるのか。それは、弱肉強食、利害打算が働く、この娑婆世界の中で、生活を懸け、人生を懸け、命を懸けて働く。そのことによって初めてわれわれは、人間と社会の本当の恐ろしさと、本当の素晴らしさに命が触れて、この命の痛みを伴った体験が、人間を本物という、そういう状態に成長させてくれるわけであります。**

**その意味で、金の苦労をせんことには、人間は土性骨が入らん。本物にならん。金の苦労をすることが職業なんですからね。金の苦労というのは、これは経済人だけじゃなくて、政治家も学校の先生も、全部の職業が経済活動です。そういう意味で、あらゆる職業はみんな金とまとわり付いてるというか、金にまとわり付いてる。だから、どんな職業でもね、金の苦労を通して人間は磨かれていくんだ。金の苦労を通して、人間の本物、偽物が分かれてしまう。職業こそ、人間を本物に磨く唯一の道場だということをわれわれは意識しながら、この仕事というものに関わる必要があります。本当の実力というのは、金とまつわる世界の中で初めてできるんだ。金と関係しない世界では、人間としての実力というのはできてこない。金がどうでもいいということになってしまったら、いいかげんになってしまう。金とまとわり付いてくるからね、人間には本当の力を発揮し努力をするということがあるわけであって、金の苦労をせんことには、本当には生きる力というものは、具体的にはできません。**

**で、その金の苦労をさせてくれるのが、職場、職業、仕事という世界であります。人の役に立つことを喜びとする感性という愛というものを、力を伴った、実力を持ったものとして成長させてくれる。その場が職業なんだということを、われわれは意識する必要がある。職業を通して、愛の実力を磨いていく。人の役に立つということは愛ですから、その人の役に立つということを通して自分自身の本当の愛の実力は磨かれていく。こうしたら相手は喜んでくれるだろうと思ってやってですね、相手が喜ばなかったら、なんちゅうやつやといって、相手を非難するようじゃ、その人間に愛はない。本当にその人に喜んでもらいたいと思ったならば、その人が喜んでくれたという結果が出るまでやめないで頑張る。こうしてみたらどうだろう。ああしてみたらどうだろう。それが自分を磨いていく、自分の愛の力を実力に変えていくというそういう努力なのであって、自分がこういうふうにしたら相手は喜ぶだろうと思ってやった結果、相手がそれをありがた迷惑だと、なんちゅうやつやといって相手が喜ばない、感謝しないことを非難するようでは、その人には愛の実力は育ちません。それは自分本位な人間です。自己中心的な人間です。本当にこの相手の役に立つということをするためには、相手が喜んでくれたという結果が出るまでやめないという努力が、必須の条件であります。そのことによって、実力ができるし、本当に愛は成長するわけであります。**

**そういうのが社会的存在としての人間の格をつくってくれるわけです。格を成長させてくれる。そういうふうに考えていくと、人間が人間の格、犬猫とは違う人間の格というものを命に宿らせるためには、謙虚さと、それから成長意欲と愛が必要だ。そういうふうに言うことができるわけです。人間の印、人間というものを象徴する、その人間であることの印というのは、謙虚さと成長意欲と愛だと。それがいわゆる人間の格というものをつくっていく基本原理だ。そういうふうに言うことができます。そのために傲慢であってはならない。謙虚さがにじみ出てくる。自分というものをつくる努力をしていかなければならないし、また、時には怠け心があって、楽がしたいということはあるけど、だけども、成長意欲を持って、より以上を目指して生きるところに、人間の本当の姿があるんだと。もうそういうことだけは、意識として忘れてはならないし、また、人の役に立つことを喜びとする感性というね、愛を持ってこの仕事をしていく。自己中心性に陥らないで、本当に相手に喜んでもらったという結果が出るまで努力をし続けてやめない。そこに人間の格、社会的存在としての人間の格をつくっていく大事な努力の仕方がある。そういうふうに、考えておいてもらいたいと思います。**

**人間の格をまずつくらないと、その次に人格を成長させるためにはどうしたらいいのかという、そういう段階に入れませんのでね、その意味で、まず人間の格というものをつくるためには、どういう努力をする必要があるのかということを、まずこのお話をさせてもらったわけであります。この話のあとね、そのできてきた人格をさらに磨いていこうと思ったら、どういうふうな努力をまたやったらいいのかという問題が、また次に出てくるわけなんです。これから日本人は、あるいはアジア人は、欧米人よりも、より優れた能力と人間性を持った全世界から尊敬され、信頼されるような、そういうこの生き方と、能力と、人間性というものを養っていく。そういう段階にこれから入っていきます。そのためにも、人間として本物というものを目指していくことは非常に大事なこの職業上での問題でもあり、またこの人間としてのあり方のうえでも、大事な問題であって、それがこの民族としての日本民族としての価値を高めていって、世界から非難されないような国家にしていくためにも大事なこれは目標となる原理です。ぜひそのことを考えてもらって、謙虚さと成長意欲と愛を持って仕事をし、また仕事の中で謙虚さと成長意欲と愛を磨いていくという生き方を、自覚的にやってみてもらいたいと思います。どうもありがとうございました。**